



### その1

埼玉県との県境にある都内の〇〇駅から歩いて五分ほどの場所にあるxxホテル最上階のバー・エレクトロアートでは、今夜も、大人の時間を楽しむ客たちが静かにグラスを傾けていた。

眼下には、遠くに池袋や新宿方面の夜景も見渡せる。

美しい夜景を堪能できるシチュエーションであるにも拘らず繁華街としての知名度が低いこともあってか、テレビや雑誌などで取り上げられたことがない。そのため、知る人ぞ知る穴場的な存在となっていた。

軽快なジャズ音楽が流れ、客たちの会話を楽しむ声とともに、ときおり笑い声も聞こえてくる。

店内はブラウン色で統一され、窓辺に等間隔に配置された二人掛け用のカウンター席には、何組かのカップルが肩を寄せ合っていた。席と席の間には目に見えない透明のカーテンが張り巡らされており、カーテンに囲われた空間の中で男と女の過去と未来が語られていた。

穏やかで甘い空気が、窓辺の一角を支配する。

そんな中、端のカウンター席で、人目を避けるようにグラスを傾ける一人の男の姿があった。

男の表情からは、悲壮感のようなものが浮き出ている。大人の会話を楽しみながら静かに酒を飲むこの場にはそぐわない空気を漂わせている。

黒服に身を包んだボーイたちも、男が発する異様な雰囲気を感じてか、端のカウンター席には近づかない。

何者をも近づけない重たい空気が、男の周囲を取り巻いていた。

男は、グラスを手にした。中の氷がバランスを崩し、カチャと音をたてる。氷で薄まったブランデーの原酒を口に含み、喉の奥に流し込む。大きく息を吐き、そして呟いた。

「どうしたらいいんだ……」

男は、窓の外に広がる都会の夜景に視線を泳がせた。

再び、呟く。

「でも、あいつの思いは遂げさせてあげたいし、あいつの心を傷つけたくもないよ……」

男は、グラスの中身を一気に飲み干した。

男は、酒のお代わりを注文した。カウンターに、新しいグラスが運ばれてくる。男は、すぐさまグラスを手に取り、濃い酒を口に含んだ。

溜息をつきながら口元をゆがませる男の表情からは、何ごとかに葛藤している様子がうかがえた。

やがて、意を決したような表情で、男はグラスを置いた。息を吐き、視線を窓の外に泳がす。

視線の先には、夜が更けるにつれて一層輝きを増した都会の夜景が広がっていた。

## その2

その頃、バー・エレクトロアートのテーブル席で向き合う二人の男の姿があった。

カウンター席は客の大半がカップルであり静かで甘い空気に包まれていたが、テーブル席はにぎやかな空気に包まれていた。客層も男性同士の客、女性同士の客、グループ客と様々であり、気心の知れた者同士で酒と会話を楽しんでいる。

そのような中、二人の男のテーブルには、他のテーブルとは異なる空気が漂っていた。会話を楽しむ風でもなく、かといって商談をしているようにも見えない。

二人ともスーツ姿だったが、見た目は対照的であった。

テーブルの奥に座った男は、イタリア製の高級スーツを身にまとい、胸を反らせていた。口を真一文字に結んだその顔からは、意志の強さが窺える。

それとは対照的に、手前に座った男は、着古されたスーツを身にまとい、顔をうなだれていた。全身がくたびれたような印象を映し出している。

二人は、押し黙ったまま、目の前のグラスをもてあそんでいた。

高級スーツ男の脳裏には、三日前の出来事が思い返されていた。

彼は、三日前も、今夜と同じ席で酒を飲んだ。彼の目の前には、若い女がいた。二人で、落ち着いた会話を楽しんだ。

「いい女だったな……」高級スーツ男は、整った女の顔を思い浮かべていた。

バー・エレクトロアートは、彼が一人になりたいときに利用している隠れ家であった。三日前も、彼は一人でグラスを傾けていた。そのとき、隣のテーブルで一人グラスを傾けていた女と意気投合し、席を共にすることになったのだ。

彼は、その女に、自分の連絡先を記したメモを渡した。女の連絡先を聞き出すことはできなかったが、女は「また私のほうから連絡します」と言い残し、彼のもとを去って行った。そのとき以来、何度となく携帯電話に眼をやる高級スーツ男であった。

そんな高級スーツ男の甘い回想を打ち破るかのように、着古しスーツ男が、哀願するような口調で言葉を発してきた。

高級スーツ男が、顔をしかめる。

「なんとか、もう少しだけ待ってもらえませんか！」

両手を合わせ拝むようにしながら、着古しスーツ男が頭を下げる。

そんな着古しスーツ男に蔑むような視線を押し当てた高級スーツ男が、言葉を返した。

「もう少しって、一度待ってあげたじゃないか。約束を守るって言ったのはキミのほうだったんじゃないのかね？ とにかく、これ以上はだめだ。約束の日までに、何とかしてもらおう！」

「そこをなんとか」

「そう言って、ズルズルと先延ばしするつもりなんだろう！ とにかく、これ以上は待つつもりはない。それでは、約束の日にまた会おう」

そう言うと、高級スーツ男は立ち上がり、伝票をつまんでレジカウンターに向かって歩き出した。

そんな高級スーツ男の後ろ姿に向かって、着古しスーツ男が憎しみを込めた視線を投げかけた

。

グラスの中身を飲み干し、皿に半分ほど残ったミックスマツを驚掴むように手に取り口の中に放り入れた着古しスーツ男が席を立った。彼の足元はふらついていて。

今日の酒は、悪酔いする酒であった。このまま高級スーツ男の協力を取り付けることができなければ、彼の身は破たんする。着古しスーツ男の胸の中を、焦りの感情が支配していた。

左右に身体をふらつかせながら、着古しスーツ男は、入り口に向かって歩き出した。何人かの客とぶつかりそうになったが、そのたびに相手が上手に身体をかわす。

入り口まであと数歩という位置に来たとき、着古しスーツ男は、トイレから戻る男性客とぶつかった。 端のカウンター席の男だった。

カウンター席の男が舌打ちをする。着古しスーツ男が、片手を上げ、カウンター席の男の横をすり抜ける。

そのとき、着古しスーツ男のジャケットからハンカチがすり落ちた。足を止めたカウンター席の男が、ハンカチをつまみあげる。

「ちょっと！」と声を発したカウンター席の男が追いかけてきたときには、すでに着古しスーツ男の姿はなかった。タイミング良くやってきたエレベーターに乗り込んでしまったようである。

カウンター席の男は、拾ったハンカチに視線を向けた。そこには、M・Sというイニシャルが書かれていた。

### その3

玄関を開けると、そこはゴミの山だった。辺り一面にモノが散らばり、据えた臭いが漂う。台所の流しにも、食事をした後の食器が積み重なったまま放置されている。その家の住人の荒れた生活ぶりがうかがえた。

その家のダイニングテーブルに向き合う男女の姿があった。

男の片手には、カップ酒が握られている。時刻は昼の一時を回ったところであったが、男は、すでに酔いが回っていた。

そんな男に向かって、女が囁くように言葉を発した。

「このまま黙っていて、悔しくないの？」

濁った眼を目の前の女に向けた男が、言葉を返す。

「そりゃあ、悔しいに決まってるだろう！」

「それだったら、相手にぶつかって行きなさいよ！」

「ぶつかって行くと、何をどうすればいいんだよ？」

「決まっているでしょ」

そう言うと、女はしゃべるのを止め、周囲をうかがうような表情を浮かべた。

昼時であり、周辺の住人も仕事に出かけているのか、隣近所からは物音ひとつ聞こえてこない。物音といえば、たまに道路を走り抜ける車の走行音が窓の外から飛び込んでくるくらいであ

った。

女が、声をひそめながら再び言葉を発する。

「家に乗りこんで行くのよ。乗りこんで行って、オレの人生をめちゃめちゃにした責任を取れって言ってやるのよ！」

「でも、どうやって乗りこめばいいんだよ？」

女につられたように、声をひそめながら、男は身を乗り出した。

「簡単なことよ」

そう言うと、女が、何ごとかを男に囁いた。

濁った男の眼の光が増す。

やがて、女が話し終えた。

男が、何度も頷く。

「よおし。あの野郎に、ガツンと言ってやるぞ！」

「そうよ。その意気よ」

言葉を返ししながら俯いた女の顔は、ほくそ笑んでいた。

## 第1章 二つの焼死体

---

### 1. 目撃者

気温が低かったゴールデンウィークから一転してこの時期らしい暖かな陽気に包まれた五月二十一日の深夜、矢原俊介は、駅から家に向かう夜道を、一人おぼつかない足取りで歩いていた。

朝夕のラッシュの時間帯はたくさんの歩行者が行き交う道も、今は、人影もまばらであった。等間隔に設けられた街灯の光が、家路を急ぐ彼の影を路面に映し出す。

今日の矢原は、しこたま酔っぱらっていた。

「まったく、課長には付き合っていないよ」歩きながら、彼は、胸の中で愚痴った。上司の課長から飲みに誘われた矢原は、三軒のはしご酒に付き合わされた。

課長は、大学の先輩だった。仕事もでき、部下の面倒見もよい。

矢原も、仕事の面では課長を尊敬していた。自分が将来課長に昇進したときの理想の姿と今の課長の姿を重ね合わせていた。

仕事の面では尊敬に値する課長だったのだが、酒癖の悪いことが玉に傷であった。

酒好きな課長は、よく部下を飲みに誘っていた。安い居酒屋だったが、必ず自分が奢っていた。

中でも、矢原が誘われる回数が一番多かった。大学の後輩でもあり独身ということもあって、誘いやすいのだろう。

今日も、矢原は、何も予定がなかったこともあって、課長の誘いに応じた。ノー残業デーでもあり、定時で仕事を終えた課長と矢原は、まだ日の明るいうちに夜の街へと繰り出していった。

毎度のことであるが、酒が深まるにつれて、課長の口が滑らかになる。時間の経過とともに、目が座ってくる。

「よし、次行こう！」と氣勢を上げる課長をなだめすかし、無理やりタクシーに押し込んだ後に通勤電車に乗り自宅の最寄り駅に降り立ったとき、時計の針は、午後十一時五十分を指していた。駅から自宅マンションまでは歩いて十五分ほどの距離であり、帰りつく頃には確実に日付が変わっている。

矢原は、一時間半の時間をかけて会社に通っていた。首都圏に住む人間にとって一時間半の通勤時間は決して長いわけではなかったが、朝食を家で取り、午前八時半の始業時刻に間に合うように出勤するためには、毎朝五時半には起きなければならない。

家に帰って、シャワーを浴び、パソコンのメールボックスを覗いた後に布団に入れば、確実に深夜の一時は回ってしまう。そうなれば、明日の朝は、間違いなく寝不足になる。

朝の弱い矢原にとって、寝不足は大敵であった。寝不足感と戦いながら布団から這い出さなければならない苦痛を思った彼は、憂鬱な気分になっていた。

矢原は、自宅に向かって、速足で歩みを進めていた。静まり返った闇間に靴音が静かに響く。

駅の改札を出たときにはたくさんいた人の姿も、駅を離れるにつれて少なくなり、今や等間隔を維持したまま彼の後を歩くサラリーマン体の男が一人いるだけであった。

歩きながら後を振り向いた矢原は、男の姿を視野に入れた。男は、うつむきながら、同じようなスピードで歩みを進めていた。皺の寄ったスーツや曲がったネクタイからは一日の疲れがにじみ出ている。矢原と同様、一分一秒でも早く自宅に帰り、睡眠を確保したいのだろう。

やがて、矢原の視界に、見慣れた十字路の交差点が映った。十字路を左に曲がれば、彼が一人暮らしをしているマンションの入り口が見えてくる。

家が近づくにつれて、矢原の酔いも覚めてきた。足取りもきちんとしてくる。

「まずはシャワーかな」家に帰ってから取るべき行動を頭の中で思い描いていた矢原の視界の中で、突然、何かが薄紫色に光った。光る方向に眼を向けた矢原の視線の先に、十字路を挟んだ道の奥に立つ男の姿が映し出された。髭を生やし眼鏡を掛けた顔が、薄らと浮かび上がる。

慌てたように顔をそらした男は、そのまま暗闇の中へ姿を消した。

矢原の記憶によれば、道の先は行き止まりになっており、突き当りの道路脇に一軒の家があるはずであった。突き当りの向こう側は、空き地になっている。

近所付き合いのない矢原は、その家の住人のことは知らなかった。

矢原は、目にした光景を気に留めることもなく、十字路を左に曲がり、帰路を急いだ。

帰宅しシャワーを浴び終えた矢原がパソコンの電源を入れたそのとき、外が急に騒がしくなった。「火事だあ！」と叫ぶ声が聞こえてくる。遠くにサイレンの音が聞こえ、その音が徐々に近づいてきた。

窓から身を乗り出した矢原の眼に、目の前の道路を小走りで駆ける野次馬たちの姿が映った。近所で火災が発生したようだ。

矢原も、火事の見物に繰り出すことにした。寝巻から普段着に着替え、部屋を飛び出す。

彼のマンションから五十メートルほど行った十字路のあたりに、野次馬たちが群がっていた。矢原が、薄紫色の光と男の姿を見かけた十字路である。

矢原は、野次馬の群れをかき分け、十字路から顔を出し、奥を覗いた。その眼の中に、赤色灯を回転させながら道路を占拠する何台もの消防車と、パチパチと音を立て空に向かって勢いよく火を吹き上げながら家が燃え盛る光景が飛び込んできた。

どうやら、燃えているのは道の行き止まりの道路脇に建つ一軒家のようにであった。

矢原は、暗闇にたたずんでいた男のことを思い出した。男が立っていた位置も、道の行き止まりの辺りだった。

「あの家の住人だったのかな？」矢原は、男が火の中を逃げ回っている姿を頭の中で想像した。

「危ないから、下がっててください！」

警官が、押しかける野次馬を押し戻し、十字路の入り口付近に黄色い非常線テープを張る。

何人かの野次馬とともに非常線テープの外に押し戻された矢原は、不安げな表情で、消火活動の続けられる火災現場を見つめ続けた。

火災は、二時間ほどで鎮火された。現場付近の住人が、警官からの尋問に答えている。

やがて、焼け跡から全体を毛布で覆った担架が二台運び出された。現場付近で待機していた救急車が、担架を収容し、すぐさま発進する。

非常線テープから身を乗り出すように消火活動を見守っていた野次馬たちも、一人また一人とその場を立ち去り始めた。

そんな野次馬たちに向かって、警官が、大声で呼びかける。

「どなたか、この付近で不審な人物などを見かけた方はおられますか？」

目撃者を捜す警官の問いかけに、野次馬たちの足が止まった。新たなショーの始まりを期待するような表情を浮かべる。

そんな中、一人の男が警官のもとに歩み寄り、火災直前に現場付近で不審な人物を見たという証言を始めた。

矢原は、その男の顔に記憶があった。家に帰る夜道を歩いていたときに、すぐ後ろを等間隔で歩いていたサラリーマン体の男であった。

男につられたように、矢原も警官の前に歩み出て、火災現場の辺りで薄紫色に光るものを見たことや髭を生やし眼鏡を掛けた男と顔が合ったこと、その男が慌てたように姿を消したことを証言した。

サラリーマン体の男も、同様の証言をしていた。

「その男の顔を、はっきりと覚えておられますか？」

警官からの問いかけに、矢原もサラリーマン体の男も首を横に振った。

道の奥は薄暗く、髭と眼鏡は認識できたものの、詳しい部分までは記憶にない。髭と眼鏡の印象が強かったために、なおさら、それ以外に関する記憶は残っていなかった。

矢原は、そう警官に告げた。サラリーマン体の男も、矢原の発言に同調する。

男の服装や背格好などについても聞かれた矢原とサラリーマン体の男は、名前と連絡先を聞かれた後に、警官による尋問から解放された。

今回の火災は事件性も否定できないということであり、後日、警察から目撃証言の内容に関する確認があると思うので、そのときは協力して欲しいということであった。

証言を終えた矢原は、全身に疲れを覚え、足早に自宅マンションへと戻った。

次の日の朝、矢原は、寝不足のまま会社に出勤した。

昨晚、火災現場から戻り、そのまま倒れ込むように布団にもぐったのだが、なかなか寝付けなかった。体は疲れていたのだが、興奮が覚めず、頭の中が冴えわたってしまった。

目をつむり眠ろうとしたが、脳が、意思に反して活動を続ける。生々しい火災の様子や現場から運び出された毛布に包まれた遺体らしき姿、警官から尋問を受けたことなど、生まれて初めて目にして体験した内容が、次々と脳裏に浮かんできた。

そんな彼がようやく眠りに付いたのは、外が薄らと白み始めた夜明けの頃であった。

会社に出社した後も、寝不足感は解消されない。そのような頭では到底仕事がかどるはずもなく、矢原は、その日も定時で退社し、そのまま帰途に就いた。

自宅最寄り駅の駅前食堂で食事を済ませた矢原が家にたどり着いたとき、時計の針は夜の八時

十分前を指していた。

すぐさま寝間着に着替え、冷蔵庫から晩酌用の缶ビールを取り出す。

そのとき、玄関のチャイムが鳴った。

「誰だよ、こんな時間に！」顔をしかめながら玄関の鍵穴から外を覗いた矢原の目に、地味なスーツに身を包んだ二人の男の姿が映った。

「どなたですか？」と問いかけた矢原に対して、「埼玉県警北川署の者です。昨日の火災の件でお話を伺いたいのですが、よろしいでしょうか」という声が返ってくる。

二人は、北川署の刑事たちであった。手前に立つ刑事が、鍵穴に向かって警察手帳をかざす。矢原は、ドアを開けた。

手前に立つ五十歳くらいの刑事は、背は低いものの戦車のようながっしりした体躯の上に髪を短く刈り上げた日焼けした丸顔が乗っており、一見して麦わら帽子が似合いそうな農夫のような風貌であった。

柔和な目つきも農夫のような風貌の中に自然と溶け込んでいたが、下唇が前に突き出た顔付きからは意志の強さも感じさせた。

彼の後ろには、首一つくらい背の高い、若い瘦躯の刑事が控えていた。色白で面長な顔に自然に流した長髪が、刑事というよりもテレビの中に出てくる俳優のような風体を感じさせる。

まったく好対照の二人であった。

玄関口に立ちつくす矢原に対して、手前の刑事が「北川署刑事一課の栗原と申します」と名乗った上で、再び警察手帳をかざす。

警察手帳には、手前に立つ刑事の顔写真が張られ、「巡査部長、栗原潤一郎」の文字が記されていた。もう一人の刑事の警察手帳には、「巡査部長、山形昭雄」の文字が記されている。

二人とも、昨夜の火災の捜査を担当しているということであった。

矢原は、刑事たちを家に上げた。二人を居間に通し、冷蔵庫の中から取り出したペットボトルのお茶をグラスに注ぎ、二人の前に並べる。

「どうぞ、お構いなく」と言いながら、二人は、美味そうに冷えたお茶を口にした。

一気にグラス半分ほどのお茶を飲み干した栗原が、「お疲れのところ恐縮ですが、昨日の火災の件で、二、三お聞きしたいことがあります。確か、矢原さんは、火災が起こる少し前に、現場付近で不審な男の姿を目撃されたと伺っているものですから」と、警官が作成した報告書を広げる。

その傍らで、山形が手帳を拵げ、ペンを握った。

緊張の表情を浮かべる矢原に向かって、栗原が「リラックスするように」と声をかける。

その後、栗原による矢原への尋問が始まった。

最初は、警官が作成した報告書内容の確認であった。

薄紫色に光るものを見たこと、男の姿を目撃したこと、姿を見られた男が慌てたように姿を消したことについて、矢原が一つ一つ報告書の記載内容に間違いがないことを確認し、口頭で間違いがないということを栗原に伝える。矢原の発言を、山形が手帳に書きつける。

一通り報告書の確認を終えた栗原が、さらに質問を重ねてきた。

「薄紫色の光ですが、どのような位置で光っていましたか？」

「どのような位置でと言いますと？」

「男の手前側から光ったのか、それとも後方からだったのか、あるいは左右どちらかだったのか、ということですが」

顔の表情を注視する刑事の視線から目をそらしながら、矢原は、昨晚の出来事を懸命に思い出した。徐々に、脳裏に薄紫色の光を見たときの光景が浮かび上がってくる。

矢原の記憶では、男は、片腕を首元の位置まで掲げていた。それは、腕時計を覗き込んでいるときのようなポーズであった。そして、首元の位置にあった男の腕の辺りから光が発していたように矢原には見えた。

矢原は、そのことを栗原に伝えた。

「腕時計を覗き込んでいるような感じだったのですか？」栗原の眼が光る。

「薄紫色の光は、確かに首元の位置に掲げた男の腕から発せられていたように見えたのですね？」栗原が、再度確認する。

頷いた矢原に対して、栗原が、右腕であったのか左腕であったのかという質問を投げかけた。

矢原は、二人の刑事の目の前で、男を目撃したときの男のポーズを再現してみせた。その結果、掲げていた腕は左腕であることが明らかになった。

その後も、栗原による質問が続いた。髪形や服装、眼鏡の色や形、髭の形、他に人影はなかったかなど、細かな質問が続く。

矢原は、細かいことは記憶になかった。光の存在と髭面、そして眼鏡を掛けていたことだけが強く印象に残り、それ以外の細かいことはほとんど記憶に残っていなかったからだ。

矢原は、そのことを栗原に伝えた上で、断片的に思い出した記憶を口にした。

一通りの質問を終えた栗原が、残ったお茶を飲み干し、更なる捜査協力をお願いを口にする。

「ご協力いただき、ありがとうございます。おかげで、貴重な捜査情報を得ることができました。お疲れのところ大変申し訳ないのですが、あと二点ばかり捜査にご協力いただきたいのですが」

捜査への協力とは、似顔絵の作成と、男の姿を目撃した位置での現場検証であった。

その場で、似顔絵作りが始められた。矢原の記憶に基づいて、山形が鉛筆を走らせる。顔の輪郭は曖昧であったが、眼鏡や髭の形は特徴を捉えていた。

その後、現場検証が行われた。

矢原と栗原が男の姿を目撃した路上の位置に立ち、山形が男の役を演じる。矢原の記憶をもとに、男の行動や背丈などの確認が行われた。

全てを終えた矢原が家に戻ったとき、時計の針は夜の十一時をまわっていた。

## 2. 捜査会議

それから三日後、北川署で捜査会議が開かれた。

署長の福山を中心にして、狭い会議室に十七名の捜査員たちが顔を揃えた。

刑事一課長の寺原警部の司会で、会議は始められた。

「まず火災原因だが、消防からの検証報告書が上がってきている。それによるとだなぁ、火元は二体の焼死体が見つかった居間で間違いないそうだ。火元には灯油のようなものをまいた痕跡があるということだ。火元の近くで焼け焦げたライターが見つかったことから考えても放火と断定してもよいと考えているが、他に意見のある者はいるかね？」

寺原が、捜査員たちの顔を見渡した。

誰も発言するものはいない。

こうして、五日前の火災は放火であると断定された。

「続いて焼死体の身元の件だが、安原班からの報告をお願いしようか」

寺原が、焼死体の身元確認を行った安原班のメンバーに視線を向けた。安原班を代表して、班長の安原警部補が起立し、報告を始める。

「一体の身元は、家主の中元義則、四十七歳と判明しました。中元部品工業株式会社という部品メーカーの社長です。自動車部品を作っている会社のように」

「家族構成は？」

「四十五歳の妻と大学生の息子と高校生の娘がいます。火災当日は、妻と二人の子どもは、妻方の法事で妻の実家がある熊本に帰省していました」

安原が、火災当日は、中元が一人で家にいたことを報告した。

「それじゃあ、もう一体の焼死体は誰なんだ？」寺原が、怪訝な表情を浮かべる。

それに対して、安原が、歯形とDNAを採取し調べているが、現在のところ身元を特定できていないことを報告した。

「わかった。安原班は、引き続きもう一体の身元の解明に全力を尽くしてくれ。次に死因なんだが、署長、検視官からの報告は届いておりますでしょうか？」

寺原からの問いかけに、署長の福山が、「昨日、県警から届いた」と、検視報告書を掲げた。

「読むかね？」

「お願いします」

福山が、検視報告書の文面を読み上げる。

検視報告書には、中元に関しては、胸部に刺傷痕が認められたこと、肺や気管へのススや煙の付着が見られないことより、死亡後に焼かれたものと断定して間違いないという内容が記されていた。

遺体の刺傷痕については、現場に慰留されていたナイフによるものと断定して構わないということであった。ナイフから採取された付着物から、中元のDNAが検出されていた。

もう一体の身元不明遺体に関しては、肺や気管には少量のススや煙が付着しており、わずかに検出された静脈血が明赤色であったことが記されていた。

静脈血が明赤色であることに関しては、青酸カリなどの毒物を飲まれた可能性も否定できないが、肺や気管にススや煙が付着していたことにより、死因は焼死である可能性が高いということであった。

また二体とも、首より下の臓器がほぼ完全に焼失していたため、精密な検視を行うことができなかったという報告も記されていた。

検視報告書の内容を確認した寺原が、「中元に関しては、殺しとみて間違いないようだな」と呟く。

続いて、目撃者証言の検証が行われた。

目撃者証言の収集は、栗原刑事と山形刑事が所属する川村班の担当であった。

川村班の捜査員たちが、ホワイトボードに現場付近の略図をあらわした模造紙を貼り付ける。模造紙を指し示しながら、班長の川村警部補が説明を始めた。

「まず現場近くの住人の証言ですが、このように十字路の向こう側には、現在中元宅以外には人が住んでいる家は三軒しかないのですが、結論から申し上げますと、三軒の住人からは目ぼしい証言は得られませんでした。火災発生時刻が夜遅かったということもあり、すでに就寝していた住人も多く、ご覧のように中元宅との間に建設中のマンションがあり、中元宅の前は見えづらい状況になっております」川村の報告に、捜査員たちが頷いた。

「それ以外の目撃証言についてですが、これは直接担当した栗原君と山形君に報告してもらいます」川村が、栗原と山形に眼で発言を促した。

栗原と山形が起立する。

二人は、川村班の中で、常にコンビを組んで行動していた。

もともと三年前に刑事課に配属になった山形の教育係として、栗原がコンビを組まされた。

新任の若い刑事は、ベテランの刑事と組み、刑事のイロハを身体で覚える。そうすることで、刑事として成長していくのである。

署長の福山は、あえて軟な部分のある山形と昔堅気なタイプの栗原をコンビに組ませた。

栗原の辞書には妥協という文字はない。真実を明らかにするまで喰らいつき続ける、粘り強い刑事であった。

ときに組織捜査から逸脱した行動を取ることもあり、周囲から「彼のやり方は、現代捜査には通用しない」と陰口をたたかれることもあったが、福山は、栗原のそのようなところを買っていた。

限られた捜査員数で多くの事件を処理しなければならない状況の中で捜査期間の短縮化や検挙率のアップが求められるため、捜査の効率性を高めるための組織捜査は必要である。組織捜査には、規律の維持が求められる。

しかし、捜査員は、組織の一員である前に刑事であった。

そして、刑事は、真実を明らかにするのが仕事である。

警察の世界に足を踏み入れて以来、一貫してその信念を持ち続けてきた福山は、ときに組織捜査から逸脱する栗原のことを、いつも庇い続けてきた。

若い山形に対しても、組織の一員である前に刑事であるということを理解させるために、あえて栗原とコンビを組ませることにしたのだ。

栗原自身も福山の思いを痛いほど感じており、若い山形に対して、ありのままの自分を見せていた。

川村からバトンを渡された栗原と山形が、ホワイトボードの前に歩み寄り、目撃者の名前と年齢をホワイトボードに書き記した。

目撃者の名前と年齢を書き終えた栗原が、報告を始める。

「現場付近で怪しい男を見たという目撃証言の件ですが、目撃者は矢原俊介（三十一歳）と作田正志（三十六歳）の二名、いずれも会社からの帰宅途中、火災発生の直前に中元宅の付近で一人の男の姿を目撃しています。目撃した地点も同じような位置です。二人とも近所に住むサラリーマンで、当人同士および中元との関係性は、今のところ見つかっていません」

説明をしながら、栗原は、目撃した位置と目撃された男の位置を指し示した。

その後、矢原と作田から聞き出した証言の内容を詳しく説明する。

「薄紫色に光るもの？」薄紫色に光るものを見たという証言内容に対して、刑事一課長の寺原が聞き返した。

「そうです」

「薄紫色に光るものか……。確か、身元不明遺体の腕に、焼けた腕時計のようなものが残されていたな？」寺原が、安原班に視線を向ける。

「はい。あれから調べましたが、バーゼル社製のLEDライトで光る腕時計です。昨年辺りから日本にも輸入され、販売されています」

安原が、同一タイプの腕時計の写真をホワイトボードに貼り付けた。

「その腕時計は、薄紫色の光を発するのかね？」

「光の種類は、赤、青、薄緑、薄紫の四種類あります」

「なるほど。すると、目撃された男に関して薄紫色の光が発せられたという証言と眼鏡を掛けていたという証言が得られており、身元不明遺体に関して腕にLEDライトで光る腕時計が残されており現場に身元不明遺体のDNAが付着した焼けた眼鏡のフレームが遺留されていたことから、目撃された男が身元不明遺体である可能性があるわけだな」

寺原の発言に、一同が頷いた。

「問題は、身元不明遺体が、被害者なのか加害者なのかということだが……」寺原が呟く。

家主である中元が殺害された後に遺体を焼かれたことから、今回の火災が放火殺人であることは明らかであった。

さらに、北川署の捜査で、道路に面したトイレの窓の鍵が開いていたことも明らかになった。何者かがトイレの窓から中元宅に侵入し、火をつけた可能性も否定できない。

寺原が、署長の顔をうかがった。放火殺人ということになれば、県警との合同捜査ということになる。

そして、署長の福山が決断を下した。

「状況からしても放火殺人であることは明らかなので、合同捜査を前提とした報告を県警に上げることにする。刑事一課は、引き続き、身元不明遺体の身元の特定や目撃者探し、現場遺留物の検証などの作業を進めてくれ」

今後の捜査方針が示され、捜査会議は終了した。

### 3. 合同捜査

埼玉県警との合同捜査が正式に決定された。それとともに、埼玉県警刑事部捜査一課内に捜査

本部が設置された。

捜査本部は、身元不明遺体の身元特定に全力を注いだ。

その結果、身元不明遺体は、徳田裕一、四十二歳、無職と判明した。中元宅から直線距離にしてさほど離れていない歯科医院に残されていた徳田の歯形が、身元不明遺体の歯形と一致した。

徳田は、歯科医院近くのアパートに一人で暮らしていた。

徳田と中元の関係が洗われた。

栗原もペアを組まされた県警の刑事と一緒に、徳田の友人知人への聞き込みを行った。

その結果、徳田のすさんだ生活実態が明らかになった。

もともと徳田はアパートで妻子と一緒に暮らしていたが、仕事をしようとしぬ徳田に愛想を尽かした妻が、子どもを連れて三カ月ほど前にアパートを出ていったということであった。

それ以来、徳田の生活は荒んでいった。

失業保険をもらいに行くときや大好きな競艇をしに出かけるとき以外は家に引きこもり、昼間から飲んだくれ、夜になると、近所の一杯飲み屋に顔を出しては管を巻くといったような生活を送っていた。

友人知人たちも、口を揃えて、最近の徳田とは疎遠になっていたことを証言した。

そんな中、捜査本部は、徳田と中元の関係について、決定的な情報を入手した。

捜査本部が敷かれてから何度目かの捜査会議が、埼玉県警内で行われた。捜査本部の指揮を執る胡桃沢管理官による進行のもと、捜査情報の確認を行う。捜査班ごとに捜査報告を行い、入手した捜査情報を説明する。

そんな中、徳田の経歴を捜査していた捜査班が、決定的な情報を入手したことを報告した。

捜査班を代表した県警の刑事が、徳田の職歴について説明を始める。

「徳田は、もともとは料理人として飲食業界を渡り歩いていたようなのですが、キレやすい性格だったようでして、あるとき勤務していた店で客と喧嘩をして、それが理由で飲食業界には居づらくなり、三年前に、ある会社に転職しています。それが、なんと中元の会社でした」

徳田が中元の会社で働いていたという報告に対して、捜査本部内にどよめきが広がった。

徳田の経歴に関する説明が続けられる。

「三年前に中元の会社に転職した徳田ですが、半年ほど前に辞めています」

「また喧嘩でもしたのかね？」

管理官からの問いかけに対して、説明に立った刑事は、「周囲の話によりますと、徳田はリストラをされたようなのです。それも、いわれのない言いがかりをつけられて辞めさせられたようです」と詳しい状況を説明した。

徳田は、部品製造ラインの仕事を任されていた。勤務態度もまじめで、これといったミスをしたこともなかったのだが、一年前、突然解雇を言い渡された。理由は、現場のルールに従わない勝手な作業を繰り返し、たびたび納期の遅延や不良品の発生を招いたということだった。

徳田には、そのような覚えはなかった。常に上長の指示に従い、現場のルールに則って作業

を行っていた。自らの不手際により納期の遅延や不良品の発生を招いたことなど一度もない。

それなのに、いわれのない言いがかりをつけられ、解雇を突き付けられた。

驚いた徳田は、懸命に弁解した。上長や同僚たちにも、助けを求めた。

しかし誰も徳田のことをかばう者はなく、徳田は、退職金も支払われないまま会社を放り出された。

同時期に中元部品工業を退職した元社員から捜査員が入手した情報によると、中元の会社は、当時、不況の影響で見込んでいた取引がいくつなくなり、焦った中元がリストラを強行したということであった。

徳田を含めた四人の社員が、時を前後して会社を辞めさせられた。それも、退職金を支払わずに辞めさせたいという中元の方針に基づいて、懲戒解雇という形で退職に追い込んだということであった。

徳田以外の解雇者は、いずれも素行面や勤務態度面で問題のあった社員であり、解雇に当たったのトラブルは発生しなかったが、勤務態度が真面目だった徳田に関しては表立った解雇理由が見当たらず、中元が中心となって理由をねつ造した。

そのことを後日人伝に知った徳田は怒り狂い労働基準監督署に駆け込んだが、中元は労働基準監督署の調べに対して、ねつ造した記録を示しながら、徳田の勤務態度の悪さを指摘した。労働基準監督署の調べに同席した何名かの社員たちも中元と口裏を合わせたこともあり、徳田の主張が受け入れられることはなかった。

そのとき以来、徳田の生活は一変した。

いわれのない理由でのリストラにヤル気を失くした彼は、新しい仕事を探すこともなく、自堕落な生活を送った。妻の言葉にも耳を貸さず、だらだらとした時間を過ごす。

徳田のことを励まし続けた妻だったが、三カ月前、子どもを連れて家を飛び出して行った。

県警の刑事が、説明を終えた。

続いて、他の捜査班が報告に立つ。

栗原も、ペアを組む県警の刑事とともに、最近の徳田のすさんだ暮らしぶりのことなど友人知人たちから聞き出した話を報告した。

全ての捜査班の報告が終了した。

各班の報告内容を踏まえた上で、今後の捜査方針について、捜査本部内での意見交換が行われる。

捜査本部内の空気は、徳田犯人説に傾きかけていた。いわれのない解雇を逆恨みした徳田が、中元を殺害し、その後家に火をつけて自殺を図ったというのが事件の構図だという考え方だった。捜査本部が入手した徳田の顔写真が、目撃者の証言に基づいて作成された火災直前に現場付近で目撃された男の似顔絵と似ていることも、徳田犯人説の有力な根拠となった。

多くの捜査員たちが、徳田が犯人であることを立証するための証拠集めに全力を尽くすべきだという主張を口にする。

そんな中、栗原は、「徳田が犯人であると決めつけるのは危険だ」という主張を口にした。殺

された中元があくどい商売をやっていたという話もあり、中元の間人関係の洗い出しをもっと行うべきだという考えからの発言だった。

北川署の捜査員の何名かが、栗原の主張に同調した。

それに対して、県警の捜査員たちが、小馬鹿にしたような視線を向ける。

県警の刑事たちにはエリート意識があった。

所轄署の刑事は、めったなことでは警察機構の上層部に昇進することはない。いわば、現場の冷や飯食らいであった。それに比べて、県警本部に所属する刑事は、昇進機会に恵まれている。成績が良ければ、警察機構の上層部に昇進することも夢ではない。

そのせいか、往々にして県警の刑事たちの中には、無駄な捜査は避け効率よく事件を解決していきたいという意識が働いていた。

そのせいか、捜査方針に関して、県警の捜査員と所轄の捜査員との間で意見が分かれることが多い。

捜査員たちの意見を黙って聞いていた胡桃沢管理官であったが、最後に「現段階で徳田を犯人と決めつけるのは危険だが、彼が第一容疑者であることは疑いようのないことでもある。よって、引き続き、目撃者捜しや遺留品の分析、被害者の人間関係の洗い出しを進めるとともに、徳田が犯人であると仮定した場合の証拠集めにも全力を注いでくれ！」と今後の捜査方針を決定し、その日の捜査会議を終えた。

## 第2章 追跡

### 1. 徳田犯人説

捜査本部から北川署への帰り道、栗原と山形は、ファミリーレストランに立ち寄り、少し早めの夕食を摂っていた。

短かった春も確実に終わりを告げ、天空には、どんよりとした梅雨の雲が腰を据えていた。今日も、湿気の多い不快な一日であった。

暑いのが苦手な栗原だが、とりわけ梅雨の時期が苦手である。じめじめとした空気に身を包まれると、全身が汗でべとついてしまう。そうすると、全身が重たく感じられるようになるだけではなく、思考能力まで鈍くなってしまふ。

程よく冷房の利いたファミリーレストランのテーブルで涼むうちに、汗が引き頭の中がスッキリしてきた栗原は、今日の捜査会議の内容を振り返った。

「気に入らんな」

栗原の呟きを耳にした山形が、彼の顔を直視し、聞き返す。

「何が気に入らないんですか？」

「徳田犯人説だよ。県警の奴らは徳田が犯人だと決めつけているようだが、どうも気に入らん」

納得のいかないことがあるときのいつもの癖で、栗原が、への字に曲げた下唇を突きだした。納得のいかないことは、とことんまで調べ尽くした上ではっきりさせたいという、彼の強い意志の表れでもあった。

山形は、そんな栗原のことが好きだった。

もともと刑事志望で警察に入った山形は、二十九歳のときに、北川署の刑事一課に配属された。

しかし、刑事の仕事は、彼が思っていた以上に過酷な仕事であった。

勤務時間も不規則であった。一日の大半を捜査で走り回り、ときには、死と隣り合わせになることもある。体力、知力だけでは務まらない、超人的な能力が必要とされていた。

右も左もわからぬまま刑事課に配属され、戸惑いと不安を拭いきれずにいた山形であったが、そんな彼に刑事のイロハを叩きこんでくれたのが栗原であった。

栗原は、昇進というものにまったく興味を示さない刑事であった。年一回の昇進試験に躍起になる同僚刑事の姿を尻目に、栗原は、地道な捜査に日々没頭し続けていた。警察に入ってから三十年の大ベテランなのであるが、階級は、いまだに山形と同じ巡査部長である。

昇進に興味を示さない栗原に対して奇異な視線を送る刑事もいたが、山形は、栗原のことを刑事の中の刑事であると思っていた。

何ごとも決して妥協はしない。例え、上司が決めた捜査方針であっても、納得のいかないことは納得がいかないと言口にする頑固さがあった。それも、ただ口にするだけではなく、とことんまで調べ尽くした上で自分自身を納得させる。

ベテラン刑事の経験や勘が重宝されていた時代は誤認捜査を防ぐという意味で必要な存在だっ

たが、組織捜査が中心となった現在の捜査体制の中では、栗原のような刑事は浮いた存在になりかけている。

幸い、今の北川署の署長は、栗原のような刑事に対して一定の理解を示してくれているため自分自身が納得いくまで調べ通すという主張を貫くことはできているが、県警との合同捜査のような本格的な組織捜査では、そのような主張が聞き入れられないことが大半であった。

今日も、栗原は、「徳田以外に真犯人がいるという目線を持った捜査も必要もある」という主張を捜査本部にぶつけた。安易に徳田犯人説に傾きかけた捜査員たちに対して警鐘を鳴らすための発言だった。その真意に理解を示した胡桃沢管理官から、山形と組んで、思うような捜査をやってみろという言葉を引き出していた。

山形は、「徳田犯人説が気に入らない」という言葉を繰り返す栗原に対して、理由を聞いてみることにした。

「徳田犯人説のどこが気に入らないのですか？」

「いろいろとあるんだがね。まずだなあ、中元のせいで仕事を失って家族がバラバラになったことが動機だったとしたら、なぜ、三カ月間も犯行を待ったんだ？ 彼のキレやすい性格からして、奥さんと子どもに逃げられた時点で、中元のところに押しかけていてもおかしくはないだろう」

「でも、こうも考えられませんか？ 奥さんと子どもに逃げられてすさんだ生活を送る中で先々への失望感が膨らんできて、それで中元を道連れに自殺するつもりで押し掛けたと。徳田の肺や気管にはススや煙の成分が付着していたということですから、自殺した可能性も充分あるわけでしょう？」

「お前さんの考えも否定はしないが、徳田のような人間は、恨みや憎しみを胸の中で溜めておくことができないタイプなんだよ。だから、中元に対して殺したくなるほどの恨みを抱えているんだったら、長いこと溜めずに直ぐにやっちゃっているはずだ」

「そんなもんなんですか？」

「刑事になって三年のお前にはまだわからんかもしれないが、二十何年も刑事の飯を食っていると、いろんなタイプの犯人と接するから、性格と行動の関係ってというのがわかってくるんだよ」

「はあ」

「それと、あっさり姿を目撃されていることも気に入らん。これから人を殺そうってときに、何で、よりによって目に付きやすい光る腕時計みたいなものをはめてくるんだ？ しかも、変装もせずに……。それも、ご丁寧に人が歩いてくる方向に顔を向けて、いかにも私が犯人ですって言っているようなものじゃないか」

「心中するつもりで来たから、あえて隠そうとはしなかったんじゃないですか？」

「心中するにしても、家に忍び込んだ上で、先に中元を殺してしまわなければならないわけだろう？ それなのに、近所の住人などに目撃されて不審者として通報されてしまったら、中元を殺すことができなくなってしまうじゃないか」

「確かに、そうですね」

「さらに、もう一つ気に入らないことがある」

「なんですか？」

「灯油だよ、灯油」

「灯油ですか？」

「そうだ。中元の妻子は、クローゼットの中にポリ容器に三分の一ほどの量の灯油を保管してあったと証言した。仮に徳田が火をつけたのだとして、なぜ彼はクローゼットの中に灯油が保管されていたことを知っていたんだろうか」

「中元を殺害した後に、家探しをして灯油を発見したんじゃないですか？」

「お前の言い分にも一理あるが、それなら、なぜ家探ししてまで灯油をまかななければならないんだ？家を燃やすだけなら、わざわざ灯油などまかなくても、家の中にある物に火をつけるだけでいいのではないかね？」

「確かにそうですね」

「それとなあ、灯油に関しては、さらに不可解な点があるんだ」

「どんなことですか？」

「検視報告書をお前も見ただろう。あれには、二体とも首より下の臓器がほぼ完全に焼失していたと書かれてあった。おそらく、身体に直接灯油をまいて火をつけたんだろう。しかし、中元宅に保管されていた灯油は、ポリ容器に三分の一ほどの量だ。はたして、それくらいの量で、臓器が完全に焼けるのだろうか？」

「どうなんでしょうかね？」

「さらに、徳田自身が灯油を持ち込んだのではないこともはっきりしている。目撃者も、目撃された男は何も手に持っていなかったと言っているし、目があつた瞬間に中元宅の方向に姿を消したとも言っている。また、事件当日は、中元一人が家にいたことになっている。だとした場合、目撃された男が徳田だったとして彼自身が灯油を持ち込んだのだとすると、灯油を家の前にも置いた上で路上に姿をさらし、その後、灯油を持って、侵入口と目されるトイレの窓から家の中に侵入したということになる。そんなのは不自然だ」

「灯油に関しては、ボクも徳田が持ち込んだのではないと思っています」

「徳田犯人説が気に入らない理由、わかったか？」

「わかりました」

「わかったんだったら、早く飯を食え！ これから、もう一走りするぞ！」

「ちょっと待ってくださいよ！」

伝票を掴み立ち上がろうとする栗原の姿を眼で追った山形は、慌てて、皿に半分ほど残っていたスパゲティを口の中にかき込んだ。

栗原と山形は、徳田のことをよく知る人物を探し歩いた。

徳田の交際範囲は、決して広くはなかった。両親や兄弟とも音信不通な状態が続いていたようである。

二人は、中元の会社を辞めた元従業員から話を聞くことにした。

元従業員たちの証言によると、徳田は、正義感が強い半面思い込みが激しく、栗原の読み通り、激高すると直ぐにでも感情を行動に移すタイプだったようである。

何度か徳田と酒を飲んだことがあるという元従業員が言うには、飲んでいる最中に、仕事中に怠慢を働く工員の話になったときに、徳田が「オレが注意してやる！」と激高し、次の日、その工員に対してものすごい剣幕で職務怠慢を咎めたことがあったということであった。

また、あるテレビの報道番組を見て、その偏った報道姿勢に激高した徳田が、テレビ局に乗り込み、抗議をしたこともあったということである。

さらに、徳田が以前勤めていた飲食店の元同僚だった人物からも、話を聞くことができた。

徳田が三年前に勤めていた飲食店をクビになったときのことを覚えているという元同僚が言うには、他の客に迷惑を掛ける飲み方をする客の態度に激高した徳田が、ものすごい剣幕でその客を咎め、そして喧嘩になったということであった。

気に入らないことがあると激高しやすく、激高した場合、胸の中で溜めることなく直ぐに行動に移す徳田の性格が明らかになってきた。

また、最近の徳田と話をしたことがあるという人間からも、話を聞くことができた。

徳田がちょくちょく顔を出していたアパート近くの飲み屋の常連客たちが語るところによると、妻子が家を出ていった当初は、中元や妻子への恨み辛みばかりを口にしていたのだが、最近になって「頑張って職を見つけるつもりだ」という言葉を、たびたび口にしていたということであった。ちゃんとした職に就いて、出ていった妻子を呼び戻したいという言葉も口にしていたということである。

さらに常連客たちは、自殺するような気配などまったく感じられなかったという言葉も口にした。

栗原と山形は、それらの聞き込み結果を捜査本部に報告した。

## 2. 死亡被疑者の送検

栗原は、県警の捜査員たちが唱える徳田の犯行動機についても疑問を抱いていた。

妻子が家を出ていったことで中元に対する恨みをかき立てたことがあったのは事実のようであるが、最近の徳田には、仕事に就き妻子を呼び戻すことに全力を注ごうとしていた様子がうかがえた。

そのような気持ちでいたのなら、古い恨みを果たした上で自殺をしようなどとは思わないはずである。

栗原と山形は、最近の徳田の様子を探るための捜査を推し進めた。

徳田の趣味の一つに競艇があった。中元の会社を辞めさせられた後も、なけなしの金を握りしめては、たびたび競艇場に通っていた。

栗原は、山形を伴い、コピーした徳田の顔写真を手に、競艇場での聞き込みを行った。

なかなか徳田のことを知っているという人物は現れなかったが、二人は、あきらめずに何度も

競艇場に足を運んだ。

そしてついに、徳田のことを知るといふ人物に巡り合った。

建設作業員をしているというその男は、栗原が示した顔写真を見て、「これ、徳さんでしょ。知っていますよ。最近、顔を見ていないけど」と言葉を口にした。

男は競艇が開催される時期は毎週のように一人で競艇場に通っており、同じく一人で競艇場に通っていた徳田と自然と仲良くなったということであった。すべてのレースが終了した時点で浮いていたほうが、その夜の食事と酒を奢る。共に沈んだときは、そのまま別れる。そのような付き合いが、ここ一年ほど続いていたということであった。

男は、徳田がリストラされたことや妻子が家を飛び出して行ったことも知っていた。

二人は、徳田に関する話を聞くために、男を競艇場の外にある喫茶店に連れ出した。

喫茶店のテーブルで男と向き合った栗原は、三人分のアイスコーヒーを注文した。

美味そうにストローでグラス半分ほどのアイスコーヒーを飲み干した男が、栗原たちが徳田に関する情報を集めているわけを訊ねる。

「最近、徳さんの姿を見ないけど、あいつ、何かやらかしたんですか？」

山形と視線を交わした栗原が、徳田が死亡したことを伝える。

「ご存じなかったですか？ 徳田さんは、亡くなりましたよ」

「えっ、徳さんが死んだ！ いつのことですか？」

「もう、一カ月ほど経ちますよ。火災現場で、焼死体となって発見されました。ニュースでも取り上げられましたが、ご覧になっていませんか？」

「いえ、知りませんでした。そうかあ、徳さん、死んじゃったのか……」男の顔が曇った。

競艇に来るときだけの付き合いだったようだが、何度も一緒に酒を飲んだ相手でもあり、男の胸の中で複雑な思いが駆け巡っているのだろう。

そんな男の顔を覗き込むように、栗原は、話を続けた。

「その件で、最近の徳田さんのことについて調べておりました、ぜひご協力いただきたいのですが、最後に徳田さんに会われたのは、いつごろですか？」

「いつだったかな……、一ヶ月くらい前だったかな。確か、柳川賞があった日だったから」

男と徳田が最後に会ったのは、火災が発生した日の五日前であった。その日は、二人ともが収支がプラスとなり、レース終了後に一緒に酒を飲んだということであった。

「そのときの徳田さんの様子は、どうでしたか？」

「どうって、いつもと変わらなかったですけど」

「徳田さんとは、どのような話をされましたか？」

「そうだなあ、どんな話をしたかなあ。その日のレースのこととかプロ野球の話なんかをした覚えはあるんですけど」

「そのとき、徳田さんは、自分自身のことについて何か話をされていませんか？ 例えば、誰かのことをものすごく恨んでいるとか、何かを計画しているとか、何か良いことがあったとか……」

「何か良いことねえ……。そういえば、再就職が決まりそうだったっていうような話をしていた

かな。昔の伝手で、雇ってくれそうな飲食店が見つかったって言っていたような気がします」

「再就職が決まりそうだって言っていたんですか？」

「はい」

「何という店ですか？」

「店の名前とかは聞いていないけど、三年前まで一緒に働いていた人が開いた店だと言っていましたよ」

「なるほど……。それ以外に、何か話をしていませんでしたか？」

「それ以外ねえ。そうだ。再就職に目途が立ったから、別居中の奥さんに連絡して戻ってきてくれるようお願いしたって言っていたな」

「それで、奥さんからの返事は、どうだったのですか？」

「奥さんも前向きに考えてくれていて、彼は言っていましたよ」

「そうですか」

男から聞き出せた話は、そこまでであった。

男と別れた栗原と山形は、その足で、徳田の妻子が暮らすアパートに向かった。

家を飛び出したとはいっても夫である徳田のことを気にしていたのであろう、連絡先を教えたということであり、妻子の住所は、徳田のアパートの中に残された住所録の中に記録されていた。

アパートの部屋に通された二人は、徳田の遺影が祀られた仏壇に線香を供え、手を合わせた。

その後、徳田の妻と向き合う。

妻は、二人が訪ねてきたことに対して、迷惑そうな顔を隠そうとはしなかった。捜査本部が徳田犯人説に傾いていることが伝わったのであろうか、刺々しい視線を二人に向けてきた。

「今日は、奥さんにお伺いしたいことがあって参りました」

「何でしょうか」

腰を低くして話しかけた栗原に対して、妻が、木で鼻をくくったような返事をした。

「オレたちは徳田犯人説に疑問を持っているのだということを最初に話しておかなきゃ、口を割りそうもないな……」そう胸の中で呟いた栗原は、妻の誤解を解くために、自分たちの考えは捜査本部内で大勢を占める考えとは異なることを口にした。

「奥さん、誤解をなさらないよう聞いていただきたいのですが、確かに捜査本部内では徳田さんが犯人だという考えを持つ捜査員が多いのは事実ですが、私たちは、そのようには思っておりません」

「そうなのですか？」

妻が、驚きの表情を浮かべる。

「はい。徳田さんが犯人だとすると不可解なことがあるものですから。それで、今日は、徳田さんの再就職に目途が立ち奥さんとお子さんを呼び戻そうとしていたという話を聞いたものですから、そのことを確認したくて参りました。徳田さんから、そのような連絡はあったのでしょうか？」

「ございました」

「再就職できそうな先のことは、具体的にお聞きになりましたか？」

「はい。昔の同僚が新しく開いた店だと申しておりました」

「なんという店ですか？」

「たしか……」

妻が、記憶をたどりながら、店の名前と大よその所在地を口にした。山形が、手帳に控える。

「徳田さんは、奥さんやお子さんたちを呼び戻そうとされたのですか？」

「ええ。そのように口にしました」

「それで、奥さんは、なんと返事をされたのですか？」

「子どもたちとも相談したのですが、徳田がちゃんと働いてくれるのだったら、また一緒に暮らしてもいいと思ったものですから、そのように返事をしました」

「それは、いつ頃のことですか？」

「徳田が亡くなる一週間ほど前だったと思います」

「そうですか。そのとき、徳田さんは、どのような反応を示されましたか？」

「とても喜んでくれて、近々面接もあるから、上手く行ったら連絡すると言っておりました」

「そうでしたか……」

「そのことって、徳田にとって、有利な話なのですか？」

「そうですね。そういう話があるのならば、徳田さんがリストラされた相手を道連れに自殺をしたという動機に疑いが出て来ますからね」

「お願いします、あの人の疑いを晴らしてあげてください。確かにあの人は激しやすい性格でしたが、人を殺したりするようなことができるような人ではありません」

「私たちも、徳田さん犯人説には疑問を抱いています。本日は、ご協力いただき、ありがとうございました。今後もお伺いすることがあると思いますが、そのときはご協力下さい」

栗原は、妻に対して、今後の協力を取り付けた。

翌日、再就職話の裏を取るために、栗原と山形は、徳田の妻から聞き出した元同僚が開いたという店に出向いた。半月ほど前に開店した日本料理店であった。

「こちらへお掛け下さい」

元同僚は、真新しいテーブル席に二人を座らせ、自らお茶を入れた。

カウンターの向こうでは、従業員らしき男が二人、仕込みに追われていた。

「お忙しいところ、お時間を取らせて恐縮です」栗原が、いきなり押しかけたことを詫びる。

その後、本題を切り出した。

「本日は、徳田さんのことをお聞きしたくてお邪魔しました」

「徳田さんのことですか？」元同僚の顔からは、徳田の死を知っていることがうかがえた。

「徳田さんが亡くなられたのはご存知ですね？」

「はい」

「実はですね、徳田さんが、あなたの店で働くという話があったということをお聞きしたのですが、その話は事実でしょうか？」

「ええ。彼は、あの通り荒っぽいところもありますけど、料理人としての腕は確かですから、彼のことを雇い入れるつもりで、話をしました」

「それは、いつごろのことですか？」

「彼が亡くなる数日前でした」

「徳田さんに対して、どのような話をされたのでしょうか？」

「料理人という立場で力を貸してほしいと言いました」

「徳田さんの答えは？」

「とても喜んでくれていまして、細かい条件などを決めるために、一週間後にこの店で話し合いをすることになっていました。そうしたら、ニュースで彼が亡くなったことを知ったものですから……。それで、急遽、別の料理人を探しました」

店主は、カウンターの中で仕込みをしている一人の男を指差した。

「もう一度確認致しますが、あなたの口からはっきりと徳田さんを雇いたいとおっしゃって、徳田さんも喜んでいたのですね？」

「そうですよ」

「わかりました。本日は、お忙しいところを、ご協力いただきありがとうございます」

「警察は、やはり彼が犯人だと考えているのですか？」

店を辞そうとした栗原たちに向かって、元同僚が問いかけてきた。

「そのように考えている捜査員もおりますが、決まったわけではありません」

「そうですか、それを聞いて安心しました。彼がリストラされた恨みを募らせて昔の雇い主を殺したというようなことを書いている新聞の記事も読みましたけど、さっきも言いましたように彼は私の店で働くことをとても喜んでいました。いまさら昔の恨みで人を殺す気になるとは、とてもじゃないけど思えません」

「私も、今日の話聞いて、徳田さんが犯人であることに疑問を持つようになりました」

自分の考えを店主に告げた栗原は、山形を促し、店を後にした。

栗原は、競艇仲間や徳田の妻、日本料理店を開業した元同僚らから得た情報を捜査本部に報告するために、県警の胡桃沢管理官の席に出向いた。

彼の頭の中では、もはや、徳田は犯人ではなかった。

中元から受けた仕打ちで仕事を失い、家族とも離ればなれになり、一時は悲惨な生活を強いられていたのだが、再就職も決まり家族と一緒に暮らせる見込みも立ち、気持ちも安定していたはずだ。今さら自暴自棄になり、中元を道連れに自殺するなどという気持ちになるはずがない。

そうなれば、徳田の犯行動機がなくなる。

栗原は、そのことを胡桃沢に伝えるつもりでいた。

執務机から顔を上げた胡桃沢は、会議室に来るよう、栗原を促した。

空いている会議室に入った二人は、テーブルを挟んで向き合った。

「今日も暑いね」額の汗を拭った胡桃沢が、エアコンのスイッチを入れる。会議室の中は、熱気が充満していた。

栗原も、ハンカチで額の汗を拭った。エアコンの冷気が、首元の汗をさらっていく。

「暑い中の聞き込み、ご苦労さん」胡桃沢が、栗原の労をねぎらった。

栗原は、聞き込みの成果を報告した。徳田の動機を打ち消す複数の証言が得られたことを強調する。

「つまり、徳田には動機がないということを言いたいのかね？」黙って報告に耳を傾けていた胡桃沢が、口を開いた。

「そうです。徳田には、動機がありません。よって、徳田を犯人とする方針は見直すべきだと考えます。それよりも、中元の周辺をもっと洗うべきです。敵の多い人間だったようですし、動機を持つ人間が他にもいるはずですよ」栗原は、徳田以外にも動機を持つ人物がいるはずだという考えを口にしました。

その発言に、胡桃沢が戸惑いの表情を浮かべる。

「実はだね、昨日県警本部長に呼ばれて、事件を早く解決するように言われた。捜査本部を立ち上げてから一カ月が経過して、状況証拠も揃っているのに何で送検しないのかということだ。マスコミからも突かれていますらしい。その後の捜査で判明したことだが、徳田の指紋と中元殺害に使用されたナイフから採取された指紋が一致した。それで県警本部長とも話し合ったのだが、被疑者死亡という形で徳田を送検することに決定した」

「徳田を送検するのですか！」

「そうだ」

「しかし管理官、先ほどご報告しました通り、徳田には中元を殺害する動機がありませんし、ましてや自殺する理由などありません。徳田を犯人だと断定するのは、無理があると思います」

「動機がないと言うけれども、事件当夜に彼が中元の家に行ったことは間違いない。再就職できたことを告げるために行ったものの、そのときの中元の態度に腹を立てて、衝動的に殺害し、自分のやったことに気が動転して、家に火を付け自殺を図ったというストーリーは、何らおかしくはない」

「再就職の報告をしに、わざわざ、自分の首を切った人間のもとに行ったというのですか？」

「料理人としての腕が買われて、もともと働いていた飲食業界での仕事に就けることになったわけだ。家族も戻ってきてくれることになった。気をよくした徳田が、昔の恨みを清算するために中元のもとを訪れたとしても、おかしくはないだろう」

「中元は、現場に落ちていたナイフで刺殺されています。恨みを清算するために訪れた徳田が、ナイフを懐に忍ばせて来たとおっしゃるのですか？」

「徳田は、あのよう荒くれ者だ。常日頃からナイフを持ち歩いていたとしてもおかしくはない。現場に遺留されたナイフについては中元の妻子も見覚えがないと言っているから、少なくとも中元が所有していたものでないことは確かだ。そうすると、徳田が持ってきたと考えるほうが自然だ。ナイフが誰のものであったにせよ、中元を刺したナイフであることは証明され、柄の部分に徳田の指紋が付いていたんだ。決定的な証拠だろう！」

「じゃあ、灯油の謎はどうなるのですか？」

「灯油の謎？」

「目撃者の証言などから、徳田が灯油を持ち込んだわけではないことは明らかです。よって家の中に保管されていた灯油をまいたということになるわけですが、一度も中元の家を訪れたことのない徳田が灯油の保管場所を知っていたとは思えません。ということは、彼は家の中を探して灯油を手に入れたということになります、それは不自然な行動です。家を燃やしたいのであれば、わざわざ灯油などまかなくてもライターかなにかでそこら辺の物に火をつければよいわけですし、そもそも気が動転していたのならば、犯行後に家探しなどしないはず。さらに、中元の妻子の証言では家の中に保管されていた灯油の量はポリ容器に三分の一ほどだったというのですが、はたして、その程度の量で、臓器を完全に焼失させるほど体を燃やすことができるのでしょうか？」

「犯行後、気が動転し、家の中を物色していたときに偶然灯油を発見し、まく気になったと考えてもおかしくはない。それに、ポリ容器に三分の一ほどの灯油があれば遺体を燃やすのには充分だ。不自然なことではない。とにかく、捜査本部としての方針は決定したんだ。週明けには被疑者死亡のまま徳田を送検する。本部長も、そのことを了解している。状況証拠も、すべて徳田が犯人であることを示しているんだ！」

胡桃沢は、徳田を送検することを宣言した。

胡桃沢の宣言通り、捜査本部は、事件はトイレの窓から中元宅に侵入した徳田が中元を刺殺し、その後家に火を放って自殺を図ったものであると断定し、被疑者死亡のまま徳田を送検した。

目撃者の証言に基づいて作成された火災直前に中元宅の付近で目撃された男の似顔絵が徳田の顔に酷似していたことや目撃者の証言から割り出した男の背丈が徳田の背丈と同じであったこと、徳田がバーゼル社製の薄紫色に光るタイプの腕時計を愛用していたことや焼け跡に残されていたナイフから徳田の指紋が検出されたこと、酒に酔った徳田が中元に対する恨み辛みを口にしていたという証言が得られたことなど、状況証拠がすべて徳田の犯行を指示していることに加えて、他に中元に対する強い恨みを持つ人物が見当たらないことが送検の理由となった。

捜査本部は解散され、捜査本部に派遣されていた北川署刑事一課の捜査員たちも北川署に戻ることになった。

栗原は納得がいかなかった。

状況証拠は徳田が犯人であることを強調していたが、最近の徳田に関しては中元を殺害しようという動機が弱いことも事実であった。胡桃沢管理官が言う通り、再就職することを告げに中元宅に出向いた徳田が中元の態度に激高し犯行に及んだ可能性も否定はできないが、彼の中ではしっくりこない。

栗原は、闇の向こう側で高笑いをしている真犯人がいるような気がしてならなかった。

そんな栗原の様子を見かねた署長の福山が、声をかけてきた。

「徳田の送検に納得がいけないようだな」福山の顔は笑っていた。

苦虫をつぶしたような顔で、栗原が言葉を返す。

「納得がいきません」

栗原は、胡桃沢管理官に聞かせた徳田犯人説に疑いがあるという論拠を、福山にも聞かせた。

「それで、君はどうしたいんだ？」福山が、栗原の顔を覗き込む。

栗原は、うなだれたまま押し黙った。

「君は、納得がいかないことは、とことんまで調べないと気が済まない性分だからな」

福山が、栗原の胸の内を言い当てる。

「送検したといっても何が起こるかわからないから、確認の意味での詰めの捜査は必要だろう。そういう意味で君が捜査を続けることを、黙認することはできる」

確認捜査を黙認することを仄めかす福山の発言に、栗原が面を上げる。

そんな栗原に向かって、福山が、期間の宣告を下した。

「黙認することはできるが、いつまでもというわけにはいかない。二週間だ。二週間で答えが出なければ、君も諦めろ」

「わかりました！ 山形君を連れていってもいいでしょうか？」

「いいだろう」

「ありがとうございます」

福山に向かって深々と頭を下げた栗原は、山形のもとへ向かった。

### 3. 真犯人の影

北川署から歩いて十分ほどのところにある喫茶店の中で、アイスコーヒーを飲みながら話し込む栗原と山形の姿があった。署長の福山から二週間の猶予を与えられた栗原が、今後の捜査方針を確認するために山形を誘った。

形の上では捜査本部は解散されたわけであり、他の捜査員たちの視線も気になった栗原は、署の外で捜査方針を話し合うことにした。

「二週間で真犯人を探し出せますかね？ それも、ボクたち二人で」山形が、自信なさげに問いかけてくる。

「二週間もあれば、いろいろなことを調べられるさ」栗原が、気合を込めて返事をする。

その後、動機を持つ人物を洗い出すために中元の周囲を徹底的に捜査する方針を口にした。

そのことに頷きながら、山形が、疑問を口にする。

「徳田が犯人じゃないとすると、いくつかの疑問が残るのですが」

「どんな疑問だ？」

「まず一つ目の疑問なのですが、真犯人が他にいるのだとしたら、なぜ徳田まで殺されたのですかね？」

「それは、徳田が傍杖を食ったからだと考えればいいんじゃないのか？」

「傍杖ですか……。それにしては、出来過ぎていたとは思いませんか？ 中元に恨みを持つ徳田が傍らで死んでいるなんて。誰が考えても、徳田が中元を殺してから自殺をしたのだと考えますよ」

「だから、管理官が言うように、徳田が再就職することを告げるなどの目的で中元宅を訪問したときに、偶然犯行が行われていて、徳田も巻き添えになったってことなんじゃないのか？」

「でも、玄関の鍵は閉まっていたのですよ。再就職することを告げるなどの目的で中元宅を訪問したのだったらトイレから侵入するのはおかしいですし、そうすると徳田と中元が一緒にいたところを真犯人が襲ったってことになるんですけど、そうすると、二つ目の疑問が出て来ます」

「なんだ、二つ目の疑問とは？」

「徳田の死因ですよ。検視報告書によると、徳田の遺体にはナイフで刺された痕跡はなかったということでしたし、目立った殴打痕なども見当たらなかったということでした。なぜ、中元だけをナイフで殺害したのでしょうか？」

「それは、徳田を犯人に仕立てあげたかったからじゃないのか？」

「徳田は、どのようにして殺害したのでしょうかね？」

「詳しいことはわからないが、何らかの方法で動けなくした上で、灯油をまいて火を付けたんじゃないのか？」

「そうだとしか考えられないのでしょうかけど……」

「とにかく、徳田が傍杖を食ったという前提で、彼の他に中元に恨みを持つ人間を洗い出すんだ！」

「わかりました」

捜査方針を確認し合った二人は、目の前のアイスコーヒーを飲み干し、七月初めの蒸し暑い街中に飛び出して行った。

二人は精力的に聞き込みを行い、中元の家族関係や仕事関係、交友関係など、ありとあらゆる角度からの情報を集めた。

その結果、中元の人物像が明らかになった。

中元は、プライベートとビジネスでは、まったく異なる顔を持っていた。

家庭では良き父親であり、妻子との仲も良好であった。妻や子どもたちの心の底から中元の死を悲しんでいる様子から見ても、家族仲が良かったことは疑う余地がない。

交友関係においても、中元の評判は悪くなかった。

釣りとゴルフが趣味であった中元は、学生時代の友人や同好会の仲間とともに釣りやゴルフに出かけることが多かった。友人たちの間では気風がよく明るい男だったと評判であり、仲間との間でトラブルを起こしたこともなかったということだった。

釣りとゴルフ以外では目立った交友関係は見当たらず、交友関係の中からも中元に恨みを持つ人物を洗い出すことはできなかった。

家庭関係と交友関係においては人から恨まれる余地などない中元だったが、仕事関係では様相が一変した。

中元部品工業は亡くなった中元の父親が興した会社であり、中元は二代目社長である。大学を卒業してすぐに中元部品工業に入社し、父親の背中を見ながら経営者としての道を歩んできた中元は、経営に関して父親の影を払拭したかったのか、社長を継いでからは、穏健派の父親とは正反対の経営を行ってきた。

父親は、創業者としては珍しく情に厚い経営者であり、できの悪い従業員であっても処分を科

すことなく、辛抱強く接していた。

取引先に対しても強引な態度を取ることはせず、資金繰りの苦しい取引先に対して、自分のところも資金繰りが苦しくなるにも拘らず請求を先延ばしすることなどもたびたびあったという。

しかし、そのような穏健なムードも、中元が社長に就任した途端に一変した。

中元は、できの悪い従業員に対しては厳しい処分を科し、取引先に対しても厳しい態度で接した。

父親が会長として社内に籍を置いている間は露骨な行動は避けていたが、父親が亡くなった後は、遠慮をする相手がいなくなったこともあり、行動は過激さを増していった。

従業員に対しては信賞必罰を徹底し、できの悪い人間に対しては解雇も辞さない態度で接するようになった。

取引先に対しても、ドライな態度で接した。

中元部品工業は自動車関連の部品を製造しており、たくさんの町工場を下請けとして抱えていた。

その下請けに対して、中元は、徹底した合理化を図った。

値下げや納期の短縮など、中元の下請けに対する要求は熾烈さを増していった。そのせいで、取引を断念する下請けも現れたが、大半の下請けは厳しい要求に耐えながら取引を続けていた。

小さな町工場にとって、新たな取引先を見つけることは容易なことではない。

そのことを理解していた中元は、足元を見るような形で、下請けに接した。

中元のことを知る関係者からこれらのことを聞きだした栗原と山形は、仕事関係に絞って、中元に恨みを抱いていそうな人物の洗い出しを行った。従業員や退職者、下請けに関して、しらみつぶしに捜査を展開する。

従業員にとって中元は厳しい社長であったが、殺しに発展するほどの強い恨みを持つような人物は見当たらなかった。

ここ一年間の退職者は五人いた。五人とも解雇されたことによる退職であり、半年前に徳田を含めた四人が、それより三カ月前にも一人の従業員が解雇されていた。いずれも、真の解雇理由は不況の影響で仕事が減ったことによるリストラだった。

二人は、徳田以外の四人について徹底した捜査を行った。

その結果、四人のうち三人は再就職を果たし、残りの一人も実家の家業を継いでいることがわかった。四人とも、事件当夜のはっきりとしたアリバイもある。

下請けについては、捜査が難航した。

中元部品工業に下請けのリストを作らせた二人は、一軒一軒下請けを訪ね、話を聞いて回った。

どの下請け関係者も、口を揃えて「中元からの要求が厳しくて大変な思いをしている」と恨み節を口にしたものの、いずれも最後は「何とかしのいでいますよ」という言葉を口にした。要求が理不尽であると感じてはいたものの、取引を失えばたちまち経営が行き詰まるため、我慢をしながら取引を続けていた。

下請け関係者の中からも、殺害に至るような大きな恨みを抱いていることを感じさせる者は見当たらなかった。

署長から与えられた二週間が、あっという間に過ぎ去った。

結局、徳田以外に容疑者らしい容疑者を割り出すことができなかった。

署長への報告を済ませた栗原と山形は、本来の刑事一課の仕事に戻った。北川署管内で発生する窃盗事件や傷害事件などの捜査が刑事一課の担当である。

さっそく管内で傷害事件が発生し、二人が所属する川村班が捜査に当たることになった。捜査情報を集めるために、捜査員たちが八方に散らばる。

栗原も、中元宅放火殺害事件のことを忘れたかのように、捜査に没頭した。

川村班が担当する傷害事件の捜査が終了した。自首してきた犯人の供述に基づいて調書を作成した川村班は、犯人の身柄を検察に送った。

束の間の平穏な時間が、川村班に訪れた。他の捜査班が抱える事件も解決しており、手持無沙汰な捜査員たちが刑事一課内のあちらこちらで談笑している。このまま事件が発生しなければ、久しぶりに早い時間に帰宅できそうである。

栗原は、自分の机で考え事をしていた。口を真一文字に結びながら、何度も唸り声を上げる。

そんな考え事をする栗原の耳に、「コーヒーでも飲みませんか？」という声が飛び込んできた。顔を上げた栗原の目に、コーヒーカップを両手に持った山形の姿が映る。

片方のカップを栗原の前に置いた山形が、空いている椅子を引き寄せ、栗原の隣に座った。

「さっきから唸り声を上げていましたけど、あの事件、まだ納得していないみたいですね」

山形が、笑いながら話しかけた。

コーヒーを一口飲んだ栗原が、返事をする。

「わかるか？」

「わかりますよ。栗原さんと組ませていただいて、もう三年も経つんです。栗原さんが納得していないときの表情は、すぐにわかりますよ」

「そうか……」

「それで、どうするんですか？」

「どうするとは？」

「署長への報告は済ませていますし、北川署の中でも捜査は終了しちゃっていますからね。あの事件については、もう、あきらめるつもりですか？」

「お前は、あきらめるのか？」

「あきらめたくはないですけど、どうしようもないですし」

「オレは、あきらめていないぞ」

「でも、どうしようもできないんじゃないですか？」

「表立った捜査はできないが、公休や非番のときに手弁当捜査をすることは可能だ。それに、今みたいな捜査の合間にも、やろうと思えばできる」

「本当に、そこまでしてやるつもりですか？」

「もちろんだ。今までも、オレはそうしてきた」

「栗原さん。ボクにも手伝わせて下さい！」

「無理はしなさんな」

「無理じゃありません。ボクにとっても、あの事件は納得がいかないんです。ボクも、刑事になったからには、納得のいくまで調べ尽くしたいと思っています。お願いします。一緒にやらせてください！」

「手弁当捜査っていうのはな、大変なことなんだぞ。警察としての捜査方針に基づかない捜査だからな。へたをすりゃ、警察をクビになるかもしれないぞ」

「それでも構いません。納得のいかないものを納得のいかないまま心にしまっておくほうが辛いです」

「困った奴だな」

いきり立つ後輩に対して苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた栗原であったが、胸の中では笑顔を見せていた。

栗原と山形による手弁当捜査が始められた。

同じ川村班の一員であり捜査のときはペアを組むことの多い二人であったが、公休日や当直のローテーションまでは同じではない。公休日や当直明けの非番であっても、いざ事件が発生すれば、捜査に呼び出されることもある。

二人は、互いの自由時間を使って捜査を進めていった。

今までの捜査の結果、従業員や退職者、下請け関係者の中からは、動機を保有するような人物は見当たらなかった。

二人は、捜査の範囲を、一年以上前の退職者や過去に中元の会社との間で取引のあった下請け、下請け以外の取引先にも広げていった。

それぞれの関係先に足を運び、中元の会社や中元自身との関係、トラブル発生の有無などについて、徹底した聞き込みを行う。少しでも疑いのある人物については、アリバイも捜査した。

しかし、これといった人物が浮かんでこない。

日を追うごとに、二人の胸の中に焦燥感が芽生えていった。

季節は移り変わり、十一月を迎えようとしていた。事件が発生してから半年近くが経過しようとしている。

署長以下北川署の捜査員たちの間に二人が中元宅放火殺害事件についての手弁当捜査を行っていることは公然と知れ渡っていたが、口を挟む者はいなかった。

北川署にとって、中元宅放火殺害事件は終わった事件である。

捜査員たちからの奇異な視線にさらされながらも、二人は、あきらめずに手弁当捜査を続けていった。

二人は、週に一度くらいのペースで、二人だけの捜査会議を行った。互いの捜査情報を確認し合い、今後の捜査方針を決定する。

今日も、山形が新しい捜査情報を入手し、二人がよく行くそば屋で、遅い昼食を兼ねながら捜査会議を行っていた。

食事の注文を済ませ、おしぼりで顔を拭いた栗原が、山形に話を促す。

山形が、ぎっしりとメモをした手帳を傍らに置き、説明を始めた。

「下請け関係について調べていたのですが、ちょっと気になる情報を入手しました」

「どんな情報だ？」

「以前、中元の会社と取引をしていた下請けに野島金属工業という会社があったのですが、去年の十二月に取引を止めています。その会社は、それから三カ月後に倒産し、社長が自殺をしています」

「社長の自殺に、中元が関係しているのか？」

「直接は関係していませんが、野島金属工業という会社は、中元の父親が会社を創業した当初からの付き合いで、自殺した野島社長も中元の父親と昵懇の仲だったそうです。資金繰りが苦しいときも互いに融通し合って乗り越えていたという話も聞きました。しかし、中元が社長に就任してからは、態度が冷たくなり、父親が死んでからは、厳しい要求を次々と突きつけられるようになったということです。父親が活着しているときは、父親が間に入り、中元と野島社長もなんとか上手くやっていたみたいですが、父親が死んだ後は、二人の関を取り持つ者もおらず、野島社長も中元との取引を止めることにしたようです」

「続けてくれ」

「中元との取引を止めた野島社長でしたけれども、新たな大口の取引先を見つけるのは難しく、すぐに資金ショートしてしまったようです。これは噂話ですが、中元が野島に関する悪い噂を流したという声も聞こえています」

「そのようなことがあったのか……。ちなみに、野島の会社は、従業員は何人位いたんだ？」

「家族以外に、十四、五人ほどの従業員がいたようです」

「家族たちは、今、どうしているんだ？」

「当時、野島は奥さんと長男一家と一緒に暮らしていましたが、借金のカタに家を追われまして、今は、長男一家は別のところにアパートを借りて暮らしており、妻は次男の家に同居しています」

「家族は、中元のことを恨んでいるようなのか？」

「同業者たちからの聞き込みでは、先代からの長い付き合いなのに一方的に厳しい要求を突き付けてきた中元のことを良くは思っていなかったようでしたが、殺したいほど恨んでいたわけでもないようでした。あくまでも、取引を止めたのは野島社長の判断だったようですし」

「しかし、その後、中元が、あらぬ噂を広めたんだらう？」

「あくまでも噂ですが」

「よし。野島社長の家族と元従業員のことを洗ってみるか！」

「そうしましょう！」

二人の捜査方針が定まった。

気がつくと、二人の目の前には、注文したそばが置かれ、湯気を立てていた。空腹を覚えた二人は、箸を割り、そばをすすりあげた。

二人は、自殺した野島社長の家族と元従業員たちの消息を追った。

野島には二人の息子がおり、いずれも野島の会社で働いていた。二人とも、今は別の会社に就職している。

中元のことをどのように思っているかと訊ねた栗原と山形に対して、二人の息子は、「良くは思っていない」と口にしたものの、「いまさら何とも思わない」という言葉も口にした。

周囲への聞き込みでも、二人の息子たちから、今でも中元のことを恨んでいるというような言葉を耳にしたという証言は得られなかった。

野島の妻は、野島が自殺して以来、心労がたたったのか、次男の家で静養する日々を過ごしていた。身体もだいぶ弱っているようであり、中元を刺殺して放火をした犯人と考えるには無理があった。

元従業員についても、一人一人消息が明らかになった。

既に再就職を決め安定した生活を送っている者については、容疑者リストから外した。いまだに再就職先が決まっていない者も何人か存在したが、いずれも中元を殺害するような強い動機は見当たらず、事件当夜のアリバイも確認できた。

そんな中、一人の元従業員の存在が残された。藤村雄太という二十三歳の男の行方がつかめずにいた。

野島社長の家族や元従業員たちの証言からも、藤村は野島社長のことを心から慕っていたということだった。

二人は、藤村の行方を追うことにした。

## 第3章 自白

---

### 1. 余命宣告

藤村雄太は、病室の窓越しに、風に吹かれながらゆっくりと舞い落ちる落ち葉を眺めていた。赤や黄に色づき始めた葉が、一葉一葉、宙を舞いながらヒラヒラと地上に向かって舞い落ちる。つい先ほど妹が花瓶に活けた花が、枕元で匂いを発していた。

「また来るね」そう言って、妹は病室から立ち去っていった。

藤村は、窓の外の景色を眺めるために横に向けていた身体を元に戻し、ベッドの上であおむけの姿勢になり、白い天井を見上げた。天井の一点に、視線を据える。

藤村の脳裏に、辛いことだらけであった過去の記憶が甦ってきた。

藤村は、波乱万丈な人生を歩んできた。

サラリーマン家庭に生まれた藤村は、幼少のころは人並みの平凡な生活を送っていた。とりわけ裕福でもなかったが、家族四人で仲睦ましく暮らしていた。彼の幼少のころの記憶には、辛い思い出は存在しない。

しかし、高校に入学した直後に、彼の人生を一転させる大変な出来事が起こった。

二十年勤続表彰でもらった有給休暇を使って旅行に出かけていた両親が、交通事故に遭遇し、この世から居なくなってしまったのである。

後には、藤村と二歳下の妹だけが残された。

藤村は、入学したばかりの高校を中退し、仕事を探した。

彼の収入と父親が勤務していた会社から振り込まれた退職金、そして両親が残してくれた幾ばくかの保険金で、自分と妹が大人になるまでの生活費をまかなうつもりだった。

しかし、中学を卒業しただけの人間に条件の良い働き口などあるはずもなく、藤村は、職を転々とした。

そんな中、妹は高校に行かせた。

「妹には不自由な思いをさせたくない」その一心で、藤村は辛い仕事に耐えた。

その後、十八歳のときに、定時制の工業高校に入学した。手に職をつけた方が良いという周囲の意見に従ったのである。

四年後、高校を卒業した藤村は、学校の紹介で野島金属工業に就職した。

そこでは、高校で習得した技術を生かすことができた。

社長の野島も、藤村に対して実の親のように接してくれた。彼が早く一人前になれるようにと、一日の仕事が終わった後に付きっきりで仕事を教えてくれた。藤村を家族と一緒に食事の場に呼んでくれることもたびたびあった。

藤村も、そんな野島社長に対して、久しく忘れていた親に対する情愛をいうものを感じ取っていた。妹も、高校を卒業し就職が決まり、藤村にも平穏な毎日が訪れようとしていた。

しかし、平穏な生活も長くは続かなかった。中元部品工業との取引がなくなったことにより会社が倒産し、社長の野島が自殺をしてしまった。

藤村は、苦楽を共にした職場の仲間と別れ、野島金属工業を去った。

野島金属工業を去った藤村に、再び波乱な毎日が訪れた。

取りあえず次の就職先を探さなければということで近所にある工場に就職したのだが、そこでは先輩従業員たちによる陰湿ないじめが待っていた。無視をされ、あるいは先輩従業員たちがわざと不良品を発生させてそれを藤村のせいにする。

居たたまれなくなった藤村は、三週間でその工場を辞めた。

その後も、藤村は短期間で職を転々とした。どの会社に入社しても、上手く人間関係に馴染めない。

そんなとき藤村の脳裏に浮かんでくるのは、実の親のように接してくれた野島社長の笑顔であった。

現代社会を彷徨う藤村に、さらなる悪夢が襲った。

二カ月前から息切れや倦怠感、発熱に見舞われるようになり、病院で診察を受けた。

診断の結果は急性白血病だった。すぐに入院しないと、命に係るという。

入院した藤村を、辛く苦しい闘病生活が待ち受けていた。

彼の身体に、容赦なく抗がん剤が投与された。そのたびに嘔吐し、頭痛に見舞われる。毛髪も抜け落ち、身体もやせ衰える。

同居していた妹が毎日病室に顔を出す以外は、見舞う者はなく、藤村は、孤独感に苛まれていた。

そしてついに、主治医が非常な宣告を下した。

その日は定期診察を受ける日であり、藤村は、主治医の待つ診察室に車椅子で向かった。

診察室に入った藤村を、主治医が優しい笑顔で迎えた。

「調子はどうかね？」

「いつもと変わりありません」

診察を受ける前の決まり切った会話が、主治医と藤村との間で交わされた。

いつもならば、主治医が採血結果を説明しながら次の抗がん剤投与の計画などを告げるのだったが、その日は、様子が違っていた。

目の前の採血結果に視線を移した主治医が、何ごとかを言い淀んでいるような表情を浮かべる。普段労わるように声をかけてくれる看護師の表情も重い。

藤村の胸の中に、嫌な予感が走った。

そんな中、主治医が口を開いた。

「大変に言いづらいことなのだが、このままの状態が続くと、あと三ヶ月くらいしか持たないかもしれない」

「三ヶ月？ 何が三ヶ月しか持たないんですか？」

「つまり……、君の身体が持たないかもしれないということだ」

「えっ！ つまり、ボクの命が、後三カ月ってことですか？」

「まだ決まったわけではない。私たちも、最大限の努力をする。ただ、今まで最善の治療を施してきたが、結果が改善されていない。かといって、これ以上の治療方法も見当たらない……。これからも、やれることはすべてやるつもりだが、状況はきちんと伝えなければならないと思い、君にこの話をした」

「……」

「私たちに信じてくれ。やれることは、すべてやる」

「お願いします……」

返事をした藤村の声は弱々しかった。

その日から、藤村は、迫り来る死への恐怖と闘わなければならなくなった。このまま永遠に目が覚めないかもしれないと思うと、夜も寝られない日が多くなった。

藤村の顔が、今まで以上にやつれていった。妹も、顔を合わせるたびに心配そうな表情で藤村のことを見つめる。

藤村は、妹には余命宣告をされたことは告げなかった。

「余命宣告などに負けてたまるか！」、「必ず治すんだ！」心を鼓舞した藤村は、妹の前では努めて明るい笑顔で接していた。

そんな藤村であったが、最近になって、頭の中で、ある光景が頻繁に甦って来るようになった。

部屋に、二人の男が倒れている。一人の男は胸から血を流しながら仰向けに倒れており、もう一人の男はうつ伏せの姿勢で倒れていた。

そんな男たちの身体に、灯油の入ったポリ容器を手にした藤村が灯油をまいていく。

ポリ容器を投げ捨て部屋の入口まで退去した藤村が、部屋の中に火のついた雑誌を放り入れる。

。

一瞬のうちに、部屋全体が火の海に包まれた。

それは、幻想的な光景であるように藤村の目に映った。

二人の男の身体を飲み込むようにバチバチと音を立てて燃え広がった炎が、生き物のように部屋の中を駆けずり回る。

その光景を尻目に、藤村は、部屋のドアを占め、家を抜け出した。

燃え盛る家を振り返ることもなく、家から遠ざかった。

藤村は、後悔していなかった。

「相手は殺されて当然の人間だったのだ」そう思うようにした藤村は、その後、何事もなかったかのように日常の時間を過ごした。

火を放ってからの何日かは、毎晩のようにそのときの光景が夢の中に出てきたのだが、そのうち、そのような夢も見ないようになっていた。刑事の足音も聞こえてこない。

藤村は、悪夢を振り払いながら、今生きることに没頭した。

そんな藤村だったが、白血病と診断され病室のベッドに縛り付けられる毎日を過ごさなければならなくなったことで、再び悪夢を思い出すようになっていた。

あのときの相手が、自分のことを死の淵に引きずり込もうとしているように思われて仕方がなかった。

抗がん剤を投与された後に、嘔吐し、のたうち回る自分の姿に、あのときの相手の姿を重ねていた。

「許してくれ！」迫り来る死への恐怖と闘いながら、藤村は、炎の餌食となった相手に対する謝罪を口にしながら続けた。

## 2. 肉迫

街中の木々の葉が紅く染まり始めた十一月下旬のとある平日、藤村の病室を、二人の男が訪ねてきた。

北川署の栗原と山形だった。

公休日だった山形は、プライベートの予定を取りやめ栗原と行動を伴にしていた。最近では、栗原の情熱に感化された若い山形のほうが手弁当捜査に熱を入れている。

栗原は、そんな後輩のことを頼もしく感じていた。

ベッドの脇に置かれたパイプ椅子に腰を下ろした二人は、初対面の挨拶を口にした。その後、手帳を拵げた山形が、栗原と藤村のやり取りを細部まで漏らさぬように記録する体制を整える。

その日は抗がん剤の投与もなく比較的症状も落ち着いていた藤村は、ベッドに上体を起こし、栗原たちに相対した。

そんな藤村に劣るような眼差しを向けた栗原が、来意を告げる。

「わざわざ病室まで押しかけてしまって申し訳ありません。実は、我々は、ある事件を追っていきまして、そのことで何点か藤村さんにお聞きしたいことがありましたので、お邪魔しました。お疲れのところを恐縮なのですが、ご協力いただけませんか？」

「はい。ボクで協力できることなら」

「それでは早速ですが、藤村さんは、中元義則さんという方をご存知ですか？」

「ナカモトヨシノリさん？ 知りません」

「中元部品工業の中元社長のことですが」

「中元部品工業の中元社長？」

「藤村さんが三月まで勤めておられた野島金属工業と取引のあった会社ですよ」

「ああ、あの会社ね」

「中元社長が亡くなったことは、ご存知なかったでしたか？」

「はい。知りませんでした」

「中元社長は、五月二十一日の夜に自宅が火事になり、中から焼死体で発見されました。ところで、藤村さんは、中元社長に会ったことはありますか？」

「いえ。ボクは、ただの工員でしたから、会ったことはありません」

「そうですか。昨年十二月に中元部品工業と野島金属工業との取引が終了していたことは知っていましたか？」

「詳しい時期は知りませんでしたけど、中元部品工業からの仕事がなくなったなどは感じていました」

「野島社長の判断で取引を終了したのですが、その理由をご存知でしたか？」

「さあ、よくわかりませんけど」

「取引が終了した後に、中元社長が、同業者に対して野島金属工業とは取引しないほうがよいというようなことを言って回ったという噂があるのですが、そのことはご存知でしたか？」

「さあ、知りません」

「もし、その噂が本当だったとすると、どう思われますか？」

「別に、何とも思わないですけど」

「野島金属工業は、主要取引先である中元部品工業との取引を終了した後、新しい取引先を見つけることができなかつたために倒産してしまったのですけれども、そのことはどう思われますか？」

「会社が潰れちゃったのは残念でしたけれども」

「藤村さんは、野島社長のことを大変尊敬していたと聞きましたが」

「ええ。すごく尊敬していました」

「野島社長が自殺されたと聞いたとき、どう思いましたか？」

「すごく悲しかったです」

「中元部品工業や中元社長のことを恨む気持ちはなかつたでしたか？」

「ボクが恨んでも仕方がないですよ」

「そうですね。ただ、藤村さんが特に野島社長のことを尊敬していたと伺っていたものですから……。ちなみに、五月二十一日の夜は、藤村さんはどちらにおられましたか？」

「五月二十一日？ そんな昔のことは覚えていませんけど」

「何とか思い出せませんか？」

「そんな、いきなり言われてもわかんないですよ」

「そうですか。思い出したら教えてください。それと、最後にもう一点確認させていただきたいのですが、徳田裕一さんという方をご存知ですか？」

「トクダユウイチさん？ 何をしている人ですか？」

「一年くらい前まで中元部品工業に勤めていた人なのですが」

「いえ、知りません」

「そうですか。わかりました。今日は、色々のご協力いただきありがとうございました。また、お話しを伺いにお邪魔するかもしれませんが、そのときはご協力ください」

藤村に一礼した栗原は、パイプ椅子から立ち、山形とともに病室を後にした。

病室を後にする刑事たちの後ろ姿を眼で見送っていた藤村は、刑事たちの姿が消えるのを確認した後、ベッドの上で大きく息をついた。

「ついに来たか……」藤村には、刑事たちが訪ねてくる予感がしていた。

このところ、毎晩のように何者かに追われる夢を見続けていた。

逃げて、逃げて、ヒタヒタと自分のことを追いかける足音が耳に聞こえてくる。振り向くと、肩をつかもうとする男の腕が身体に向かって伸びてくる。追いかけてくる男の顔は見えない。そんな追手に向かって、藤村は「来るなあ！ 来ないでくれえ！」と叫び続けていた。

彼は感じていた。

今日病室を訪ねてきた二人の刑事は、自分に対する疑いを抱いていたことを。

「これからも、何度もやって来るんだろうな……」日に日に体調が悪くなっていく中で刑事たちの鋭い追及をかわし続けなければならなくなることを思った藤村は、不安に苛まれた。

「負けちゃうかもしれないな……。でも、あいつのことは、このオレが守ってやらなければ……」決意を固めた藤村は、天井の一点に鋭い視線を送った。

病室を後にした栗原と山形は、都心のターミナル駅に向かう私鉄電車に乗った。このまま家に帰るにしても一度署に顔を出すにしても、ターミナル駅を経由しなければならない。

時刻は午後四時前であり、帰りの通勤ラッシュとも逆方向であるせいか、車内は空いていた。二人は、座席に並んで腰掛けた。

扉が閉まり、静かに電車が動き出す。

電車が動き出すのと同時に、栗原が口を開いた。

「藤村だが、どう思う？」

「そうですねえ」

問いかけられた山形が、栗原と藤村のやり取りを克明に記録した手帳を取り出し、メモをした内容を読み返しながら返事をした。

「はっきりいって、臭いますね」

「どんなところが臭うんだ？」

「まずですねえ、中元のことを知っているかという質問に対して、即座に知らないと答えたことですよ。普通、すぐには頭に思い浮かばなくても、どんな人なのかを聞いてから返事をしますよ。現に、徳田のことを知っているかと聞いたときは、何をしている人かと問い返してきましたから。あれは、明らかに中元のことを知っていて知らないと返事をしていますよ」

「オレも、そう思った」

「それに、中元のことを思い出した後に彼が死んだことを告げたときも驚いた風でもなく、何があったのかを聞こうともしませんでした。あの反応も、不自然に感じます」

「うんうん」

「それと、五月二十一日夜のアリバイを訊ねたときも、妙にあっさりとして返事をしていましたよ。事件があったときのアリバイを聞いているんですから、犯人でないのなら、何でそんなことを聞くんたというような反応をするのが普通でしょう」

「そうだな」

「栗原さんは、どう思われたのですか？」

「オレも、藤村は臭いと思っているよ」

「理由は何ですか？」

「まあ、だいたいお前さんと同じなんだが、もう一つ気になったのは、野島の会社が倒産した経緯を何も知らないと返事をしたことだよ。藤村は野島のことを実の親のように慕っていたわけだし、野島も何度も家で一緒に飯を食わすくらい藤村のことを可愛がっていたということだった。それなのに、会社が倒産した経緯を彼が何も知らないなどというのはおかしい」

「栗原さんの言われる通りだと思います。これからどうしますか？ 藤村の周囲を、もっと探ってみますか？」

「もちろんだ。親のように慕っていた野島を死に追いやった恨みを晴らすという動機も成り立つし、今日の対応にも不自然なところが多い。藤村には、クロの臭いがする。もし彼が本ボシならば、事前に現場付近の下調べをしているはずだ。それと、五月二十一日夜のアリバイも調べる必要もある。どうだ、これから、もう一丁仕事をするか？」

「そのつもりです」

「そうか」

頼もしい返事に思わず笑みを浮かべた栗原は、今後必要な捜査の内容について口にした。

その後の捜査により、藤村の犯行を疑わせる二つの証言が集められた。

一つ目は、中元宅の近所に住む主婦とサラリーマンが、火事のあった日の少し前に、自宅近くで藤村らしき人物を見かけたという証言であった。藤村を含めた何人かの男の顔写真を見せたところ、二人とも、迷うことなく藤村の顔写真を指し示した。主婦は、藤村らしき人物が中元宅の前に立っていたところを目撃したということも証言した。

二つ目は、五月二十一日の夜に関することだった。証言者は藤村が妹と一緒に暮らしているアパート住人であり、当日の夜十時ごろに、家を出て駅の方角に向かう藤村の姿を見かけたということだった。その日は、目撃者にとって特別な日だったということであり、五月二十一日で間違いないと断言した。

藤村のアパートから中元宅までは、電車を使えば一時間程度で着く。藤村は車を所有していないが、通りに出てタクシーを拾えば、三、四十分ほどで着くことも可能なはずだった。

証言を入手した栗原と山形は、再び、病室に藤村を訪ねた。

藤村に対する最初の事情聴取を行った日から一週間後、病室に、栗原と山形の姿があった。

その日も、栗原が質問役で山形が記録係だった。

栗原は、労わるような表情で藤村に話しかけた。

「体調は、いかがですか？」

「まあ、なんとか……」

「そうでしたか。このような状態のときに何度も押しかけて、申し訳ありません。刑事というのは、因果な商売でしてね。一つ一つ疑問を潰していかなければなりませんのでね。早速ですが、中元さんの家に行ったことはありませんか？」

「ありません」

「そうですか。直接家の中に入ったことはなくても、家の近くに行ったこととかは？」

「……ありません」

「そうですか。実はですね、中元さんの家の近所の住人に話を伺ったところ、火事のあった日、つまり五月二十一日のことですが、その少し前に、自宅近くであなたの姿を目撃したという方がおられるのですよ。目撃した方は二人いらっしゃいまして、それぞれ、目撃した日も異なります」

「……」

「どうですか？ 本当は、中元さんの家の近くに行かれたことがあるんじゃないのですか？」

「いいえ」

「そうですか。証言をされた方々は、何人かの男性の顔写真の中から迷うことなくあなたの顔写真を指し示したのですがね」

そう言うと、栗原は、六人の男の顔写真を並べた。そのうちの一人は藤村だった。

藤村が、並べられた顔写真から視線をそらす。

表情の変化を見逃さまいと、栗原と山形が、藤村の顔に視線を当てる。

二人の視線に根負けした藤村が、言葉を発した。

「ボクは、知らない街をあてどなくフラフラと歩いてみるのが好きなんです。時間があるときに、気が向いた駅で電車を降りて、付近の街をフラフラと歩いたことも何度もあります。だから、そのときに、たまたま中元さんの家の近くを歩いていたのかもしれませんが」

「中元さんの家はですね、路地奥の行き止まりにあるのですが、人の気を惹くようなものでもない普通の路地です。そんな変哲もない場所を、二度も訪ねたのですか？」

「いつも気の向くままに散策していますから、たまたま同じ時期に同じ場所にたどりついてしまったのかもしれませんが」

「なるほどね。ちなみに、五月の連休明けから半ばごろまでは、どの地域を散策していましたか？」

「すみません。覚えていません」

「記録とかはつけていないのですかね？ 日記をつけたり、写真を撮ったりとか」

「ボクは日記をつけませんし、カメラも持ち歩いていません。あくまでも、そのときそのときの新鮮な光景に出会いたいのです」

「そうですか……。話は変わりますが、あなたは、五月二十一日の夜に外出されていますね？」

「さあ」

「いや。あなたは、その日の夜十時ごろに外出しています。同じアパートの住人が、駅の方向に向かうあなたの姿を目撃しています。どちらに行かれたのですか？」

「覚えていません」

「しかし、夜の十時ですからねえ。これからどこかへ出かけるという時間ではないでしょう。それとも、あなたは、そんな時間にしょっちゅう出かけて行くのですか？」

「しょっちゅうじゃないですけど、外出することはあります。コンビニに買い物に行ったりだとか、夜の散歩を楽しんだりだとか……」

「ちなみに、その頃も妹さんと同居しておられたのですね？」

「そうです」

「今、アパートの部屋は、妹さんがお一人で住まわれているのですか？」

「はい」

「妹さんが、あなたの行動を覚えているかもしれませんね」

「……」

「つかぬことを伺いますが、あなたの身長は何センチですか？」

「百七十八センチです」

「なるほど。ちなみに、五月の頃は、今よりももう少しふっくらとされておられたのでしょうな」

「はい」

「髪形も、この写真と同じでしたか？」

栗原が、目撃証言を集めるときに使った藤村の顔写真をかざした。

顔写真を一瞥した藤村が、「髪形は、ここ何年も変えていませんけど」と返事をする。

「わかりました。なるほど」

「それが、どうかしたんですか？」

「ある人に似ているなど思いましたね」

「誰にですか？」

「いや、たいしたことではありません。本日は、体調がお悪い中でのご協力ありがとうございました。また日を改めて伺いますので、そのときはよろしく願います。それと、何か思い出したことがありましたら、ここに連絡をください」

名刺を一枚枕元に置いた栗原は、山形を促し、病室を後にした。

病室を出た二人は、主治医のもとに足を運んだ。藤村の病状を確認しておきたかったからである。

「藤村が何かしたのか？」と不審がる主治医に対して、栗原が「ある事件に関する証言を得るために藤村のもとに通っているのだが、彼の証言が事件解決の鍵になるため、意識がしっかりしているうちに証言を引き出したい」と返事をし、病状について話してくれるようお願いをした。

栗原の言葉を聞いて納得したのか、主治医が、藤村の病状を語り始めた。

それによると、藤村に対しては効果的な治療法がなく、事実上の延命措置を施している状況であるということだった。いつ意識が混濁してもおかしくはないということも、主治医は口にした。

本人には、少し前に「最悪の場合、余命三カ月程度である」と伝えたが、藤村が、そのことを家族や知人たちに話したかどうかはわからないという。

主治医に礼を述べた栗原と山形は、複雑な思いを胸に、病院を後にした。

病院の最寄り駅まで歩きながら、二人は、今日の藤村とのやり取りの内容を振り返っていた。

「どうやら、藤村は事件に係っているな」栗原が呟いた。

「私も、そう思います」山形が頷く。

「問題は動機だな。親のように慕っていた野島社長が自殺した原因を作ったということに関して中元に対して恨みを抱えていたことは間違いないと思うが、殺害にまで至ったんだ。もう少しはっきりとした動機があるはずだ。それを見つけることができれば、署長に報告して再捜査を頼んでみるつもりだ」

「証拠集めは、もうやらなくていいんですか？」

「時間があればやりたいが、現時点でも状況証拠としては充分だろう。特に、事件直前に中元宅の近辺をうろついている姿を二人の人間に目撃されたのは決定的だろう」

「そうですね。一つ教えて欲しいのですが、藤村の身長や髪型を聞いていましたけど、あれは、どういう意味なんですか？」

「お前は、ピンと来なかったか？」

「何をですか？」

「徳田と藤村が似ているような気がしたんだよ。身長は同じだし、髪型も似ている。今の藤村がもう少しふっくらとしていて髭とメガネで変装したら、遠目から見たら徳田に見えないこともない」

「それって、事件にどう影響してくるんですか？」

「それはまだオレにもわからんが、藤村が本ボシだとすると、容姿の似ていることが事件を解く鍵になるのかもしれないと思っている。刑事としての勘だけだね」

栗原の勘は、当たることが多かった。

気がつくのと、二人の目の前に最寄り駅が迫っていた。

### 3. 病床の告白

刑事たちが去り病室に一人残された藤村は、頭の中で思いを巡らせていた。

栗原が言い残した「ある人に似ていると思った」という言葉が、彼の胸の中に引っかかっていた。

「あの刑事は、明らかに徳田が犯人ではないという前提で物事を見ている」つまり、自分が犯人であるという前提に立って捜査を進めていることが痛いほど感じ取れた。

初めて病室を訪ねて来たときは参考程度に話を聞くというような質問内容だったが、今日は、明らかに自分のことを容疑者として見ていることを感じさせた質問内容だった。アリバイに関して、妹から聴取してみるようなことも言っていた。

藤村の胸の中に、焦りの気持ちが芽生えてきた。刑事たちによって、一枚一枚ペールをはがされているような錯覚に陥っていた。

そんな藤村の脳裏に、野島社長から会社が倒産すると告げられた日の光景が甦って来た。

終業時刻のブザーが鳴った後、全従業員が事務所に集められた。

そこで、野島が、会社が倒産することを説明し、詫びた。

従業員の間にも動揺が広がった。誰も、野島のことを責める者などいない。しかし、倒産することを聞かされた従業員たちは、皆、悲壮な表情を浮かべた。

説明し終え、うなだれる野島の姿を尻目に、従業員が一人、また一人と事務所を後にする。気がつくや、事務所には野島と藤村の二人だけが残されていた。

「一杯やるか？」野島が、飲みを誘った。

二人は、野島行きつけの小料理屋の暖簾をくぐった。二人とも、言葉を発することなく出された料理を摘みながら酒をあおる。

やがて、野島が口を開いた。

「会社がつぶれてしまったのは誰のせいでもない、すべてオレの責任なんだ。だから、このことで誰かを恨んだりなどしてはいけないぞ！」

「はい」

「中元さんのことを悪く言う人もいるが、オレは、決して中元さんのことを恨んではない。いろいろとあったが、この会社がここまで来られたのも中元さんのおかげなんだ。だからキミも、例えオレがいなくなったとしても、中元さんのことを恨んだりしてはいけないぞ」

「わかりました。ただ、オレがいなくなったらって、どういう意味ですか？」

「……息子たちには話してあるが、キミにも話しておこう。実は、オレは癌で、もう長くは生きられない。医者から、そう言われた……。オレの目の黒いうちに会社がつぶれてしまったことだけが心残りだが、幸せな人生だったと思っている。本当は、息子たちやキミが成長する姿を見たかったのだから。まあ、これも運命だ」

「社長……」

「こら、泣くんじゃない。酒がまずくなるだろう！ そんな簡単には死なないよ。倒産するにしても色々と手続きがあるしな。息子たちが後々困らないようにしておかなければならないし、キミにもまだまだ教えておきたいことがあるからな……。簡単には死ねないんだよ。今日は、キミに人を恨むような人生を送るなということをお教へしておくよ」

「ありがとうございます」

追憶にふけていた藤村の目に、涙が浮かんで来た。

結局、自分は野島の教えに反した生き方をしてしまった。自分が死の淵に立たされているのも、野島の教えに反してしまったことの報いなのであろう。

藤村の脳裏に、あのときの男の表情が浮かび上がってきた。殺す必要のなかった相手である。それも、自分が殺したのも当然の結果だった。

藤村は、思い悩んでいた。

日に日に身体も弱り、刑事たちと対峙するのが辛い。

しかし、刑事たちは、事件の核心部分に向かって突き進んでいる。

「自分の意識がしっかりしているうちに、すべての幕を下ろす必要があるのではないだろうか……」藤村は、胸の中で葛藤を繰り返した。

五日後、病室に栗原の姿があった。藤村から「話したいことがある」という連絡を受け、急遽病室に駆けつけた。

今日は、相棒の山形の姿はない。本当は二人で駆けつけたかったのであるが、彼は抜け出ることができなかった。

ベッドの中の藤村は、一段とやつれたように見えた。

ベッドのそばに活けられた花瓶の花が、強い匂いを発している。藤村の妹が、定期的に花を活け変えているということだった。

「忙しいのに、呼び出したりしてすみません」藤村が、弱々しい声で、急に呼び出したことを詫言じた。

「真実を調べるのが私たちの仕事ですから、事件のことについて何か話してもらえませんか、いつでもどこへでも飛んでいきますよ。ところで、今日はメモを取る役の相方がどうしても都合がつかなかったので、お話しいただく内容を録音させてもらってもいいですかね？」栗原は、小型のICレコーダーを見せた。

藤村が首を縦に振ったのを確認した栗原は、録音ボタンを押した。

その後、しばしの時間、病室を沈黙が支配する。

藤村は、何から話せばよいのかを頭の中で整理しているかのような表情を浮かべていた。

栗原は、柔らかい眼差しを藤村に向け、口が開くのを待った。

やがて、気持ちの整理がついたかのように、藤村が口を開いた。

「刑事さんは、中元さんの家が燃えて中から焼死体が見つかった事件を調べているんですよね？」

「はい」

「実は……、あれをやったのはボクです」

「……」

「あの……、何から話せばいいんでしょうか？」

「そうですね。それじゃあ、あなたがあの日の夜に中元さんの家に行ったときのことから話してください。夜十時ごろ駅の方角へ向かう姿をアパートの住人に目撃されていますが、あれは中元さんの家に向かうところだったのですよね？」

「そうです」

「じゃあ、そこから話してください」

「わかりました」そう返事をした藤村は、上体を起こし、ぽつぽつと事件のことを語り始めた。

事件当日の夜に藤村が中元の家を訪ねることは、予め、中元との間で約束をしてあった。

藤村は、野島社長から、中元が下請けいじめを行った経緯を記録した書類を預かっていた。それは、下請け保護の法律に違反するような内容だった。

その後、野島社長が自殺し、生活の安定しない日々が続く中で、中元に対する恨みが募り、藤

村の方から中元に連絡を取った。事件の四日前であった。

下請けいじめの記録を預かっていることを伝えた上で、「誠意のある対応を見せないのなら、記録を公表する」と脅した藤村に対して、中元が「一度ゆっくりと話しがしたいから、自宅まで来てほしい」と返事をした。

事件当日の夜を指定したのは、中元のほうだった。仕事の都合で夜の十一時くらいに来るようにと言われていた。

藤村は、夜十時にアパートを出て中元宅に向かった。妹には、知人の家に行くと言って家を出た。

公共交通機関を使い、中元宅へは夜十一時過ぎに着いた。

玄関のチャイムを鳴らした藤村を、中元が迎え入れた。

居間に通された藤村は、下請けいじめの記録を突き付け、会社が倒産したのも野島社長が自殺したのも自分が現在不安定な生活を送っているのも、すべて中元のせいだと攻め立てた。

記録に目を通した中元は、「キミは、オレにどうして欲しいんだ？」と問いかけてきた。

それに対して「野島社長の墓前で詫びて欲しい」と言葉を返した藤村だったが、中元は小馬鹿にしたような表情を浮かべながら、「ビジネスは、食うか食われるかだ。それをなんとかするのが経営者の腕だ。会社がつぶれたのも、死んだ野島さんが馬鹿だったからだ。キミが路頭に迷っているのも、キミの実力不足が原因なんじゃないのか？」と罵倒した。

藤村は、頭に血が上った。

気がつくのと、いつも持ち歩いていたナイフで中元の胸を刺していた。

胸から血を噴き出しながら、中元が床に倒れ込んだ。

藤村は、慌てて握りしめていたナイフを放り出した。茫然とした表情で、周囲を見渡す。

そんな藤村の視線の先に、居間の入り口付近に立ちつくす男の姿が飛び込んできた。徳田だった。

驚きの表情を浮かべた藤村のもとに徳田が近づく。

藤村は、徳田を突き飛ばし、そのまま外に逃げようとした。

徳田が、藤村の腕をつかんだ。二人は、格闘になった。

気がつくのと、徳田も倒れていた。

徳田も死亡したものと思った藤村は、気が動転した。ものの弾みとはいえ、二人の人間を殺してしまったからだ。

防衛本能から偽装工作を施そうと思った藤村は、放り出したナイフを拾い、柄の部分の指紋をふき取った上で徳田に握らせた。

その後、居間から飛び出したが、これからどうすればよいのかを考えることができず、あてどなく家の中をうろついた。

そんな藤村の目に、クローゼットの中にあつたポリ容器が飛び込んできた。容器の中には、三分の一ほどの量の灯油が入っていた。

とっさにポリ容器を手にとった藤村は、居間に引き返し、中元と徳田の身体に灯油を振りまいた。

傍にあった雑誌に持っていた使い捨てライターで火を付け、火のついた雑誌を灯油で沁みた二つの遺体に向かって投げ入れる。遺体に火がついたことを確認した藤村は、居間から飛び出した。

そのまま玄関から外へ出ようとしたが、泥棒の仕業に見せかけたほうがよいと考え、トイレの窓から脱出した。

家の外に出た藤村は、大通りまで歩いてタクシーを拾い、アパートに戻った。

藤村が、犯行の一部始終をしゃべり終えた。一気に疲れが来たのか、何度も肩で大きく息をする。

栗原は、ICレコーダーの一時停止ボタンを押し、しばらく横になるよう声をかけた。

藤村が、倒れこむようにベッドに横になり、目を閉じる。

栗原は、藤村の目が開くのを待った。

五分ほど経過し、目を開けた藤村が、「もう大丈夫です」と言葉を発した。再び、上体を起こそうとする。

その様子を目にした栗原は、「横になったままでいいですよ」と手で制し、質問を投げかけた。

「今度は、私のほうから質問をさせていただきますから、答えてもらえますか？」

「はい」

「まず、ナイフの件なんですが、いつも持ち歩いていたということですが、どうして持ち歩いていたのですか？」

「不良少年に絡まれてお金を奪われたことがあって、そのとき以来、自分の身を守るために、いつも持ち歩いていました」

「いつ頃からですか？」

「野島社長の会社を辞めてすぐのことだったから、四月位かな」

「中元さんを刺したナイフは現場に放置されていましたが、その後、新しいナイフは購入したのですか？」

「いいえ」

「なぜですか？ 自分の身を守るために持ち歩いていたのですよね？」

「ええ。でも、人を刺してしまって、それ以来、ナイフを持つ気がなくて……」

「そうですか。では、次は火をつけたときのことを聞かせてもらいたいのですが、クローゼットに保管してあった灯油容器を、よく見つけれられましたね？」

「はい？」

「家中の電気をつけながらうろついたわけではないでしょう？ 居間の電気はついていたとしても、それ以外のところは暗かったはずです。特に、クローゼットの中などは」

「そうですけど、クローゼットを開けたときに、偶然目に入ったのです」

「灯油の容器は、クローゼットのどのあたりにありましたか？」

「よく覚えていないですけど、そんなに奥まったところではありませんでした」

「そうですか。それと、ライターなんですが、何で現場に置いてきてしまったのですか？ 灯油がまかれた場所に火のついた雑誌を投げ入れるのであれば、先にライターをしまってからでないと危ないのではないですか？ 灯油はいっぺんに燃え広がりますから、可燃性のライターを手を持ったまま火をつけるのは大変危険ですし、現場に残すことで証拠の品にもなりますから」

「よく覚えていないのですが、しまおうとして落としてしまったのかもしれませんが」

「ちなみに、雑誌に火をつけたのは、二人の遺体がある地点からどの程度離れたところだったのですか？」

「二、三メートルくらい離れたところだったと思います」

「二、三メートルですか……。それでは、次に下請けいじめの記録について聞かせてもらいますが、いつごろ野島社長から預かったのですか？」

「工場が閉鎖された日です」

「というと、三月の最終日？」

「そうです」

「野島社長は、なんと言って、あなたに預けたのですか？」

「もう今日で会社は終わりだし、これ以上自分が持っても仕方がないからキミに預ける、と言われて預かりました」

「なるほど。それにしても、もっと早く中元さんに連絡してもよかったですのではないですか？ 例えば、野島社長が自殺された直後とかに。確か、野島社長が亡くなられたのは、四月三十日でしたよね？」

「はい」

「なぜ、野島社長が亡くなられてから半月以上も経ってから連絡を取ったのですか？」

「なぜって言われましても……」

「もともと、中元さんに対する恨みがあったわけでしょう？ それでしたら、尊敬している野島社長が自殺したときに感情が爆発するのが自然じゃないのですか？」

「確かに、社長が自殺したことを知ったときに中元さんを恨む気持ちが強くなりましたけど、そのときは、なにか言ってやろうなどとは思いませんでした。でも、時間が経つごとに腹立たしくなってきた、それで……」

「衝動的に連絡を取ったのですか？ ちなみに、野島社長から預かった記録は、今でも持っていますか？」

「いいえ」

「どうされたのですか？」

「火災現場に捨てて来ました。中元さんも死んでしまったし、これ以上ボクが持っても仕方がなかったですから」

「そうですか。それでは、最後の質問ですが、泥棒の仕業に見せかけようということでトイレの窓から脱出したということですが、玄関から出ようとしたときにそのことを思い付いたのですか？」

「はい」

「一刻も早く現場を離れなければならないという状況下で、よく、そのような気転が働きましたね」

「なぜだかわからないですけど、そのように閃いたんです」

「そのとき、トイレの窓は、鍵がかかっていましたか？」

「鍵？ たぶん、かかっていなかったと思います」

「なるほどね。わかりました。今日のところは、ここらへんで結構です」

「……」

「また、日を改めて病室に伺います」

「あの……。ボクを逮捕しないんですか？」

「自供を得ただけでは逮捕できませんよ。それに、一事不再理の原則というのがありますね。一度判決が確定してしまった事件について再び裁判を行うことができない決まりがあるので。今回の事件も、亡くなった徳田さんを送検して結審してしまっていますのでね。ただ、真実は明らかにしなくてはならない。今日のあなたの供述内容に基づいた裏付け捜査を行います。本当は、あなた立会いのもと行いたいのですが、主治医が許してくれないでしょうからね。裏付け捜査が終了するまで、何度か病室に足を運ばせてもらいます。裏付け捜査が終わった後のことは、上の判断になりますかね」

「そうですか……」

「とにかく、あなたにお聞きしなければならないことが、まだまだたくさんあります。主治医も諦めていません。あなたも、諦めることなく病氣と闘ってほしいです」

「ありがとうございます」

礼の言葉を口にした藤村の顔は、濡れていた。

## 第4章 真実(まこと)の愛

---

### 1. 疑惑

栗原は、藤村から自供を得たことを、北川署の福山署長と寺原刑事一課長に報告することにした。

山形を伴い北川署の会議室で二人と向き合った栗原は、テーブルの上に置いたICレコーダーの再生ボタンを押し、藤村の供述内容を聞かせた。

供述の再生が終わった。

束の間の沈黙の後、福山が口を開く。

「とんでもないものを引っ張り出してしまったようだな」

「なんせ、県警が起訴した上で結審している事件ですからねえ」

寺原も、困惑した表情を浮かべる。

そんな二人に向かって、栗原が意見を口にした。

「確かに一時不再理の原則から言えば、これ以上はどうしようもできないのかもしれませんが、真実は明らかにするべきです。もともと、北川署内では徳田犯人説に疑問を示す声があったのです。再捜査に持って行くよう、県警に掛け合うべきではないでしょうか」

「掛け合うってねえ、県警にもメンツがある。いくら自供が得られたからって、はいそうですかって言うわけにはいかないだろう」

寺原が反論する。

その発言に頷きながら、福山が言葉を発した。

「確かに寺原課長が言うように県警もおいそれとは首を縦には振らないだろうが、これだけはっきりとした供述があるんだ。県警に話を持っていくためにも、まずは、裏を取ることが先決だろう。供述内容に間違いのないことが確認できたら、県警と共に再捜査を行うことを検討する必要があるのだと思う。栗原君、藤村の容体はどのような感じなのかね？」

「まだ意識ははっきりしていますが、主治医の見解ですと後一ヶ月くらいの可能性が高いそうです。そうなると、藤村の意識がはっきりしている時間も限られてきます」

「そうか。それでは、今日からキミと山形君に藤村の供述の裏付け捜査をやってもらう。本当はもう少し人を割きたいのだが、年末になり事件が増えてきているからねえ。キミたち二人で、しっかりとした裏付け捜査をやってもらいたい」

「わかりました」

栗原と山形に、裏付け捜査の命令が下った。

裏付け捜査が開始された。

二人は、北川署の中で捜査方針などの打ち合わせを行った。手弁当捜査のときは、他の捜査員たちに遠慮して打ち合わせも署の外で行っていたのだが、今は署長からの命令に基づいた捜査であり、他の捜査員たちの目を気にする必要もない。

栗原は、山形に向かって、自分の胸の内を伝えた。

「実はな、オレは、藤村の供述内容に対して疑問を抱いているんだ」

「えっ、そうなんですか？」

山形が、目を丸くした。

「彼の供述には、不自然な点がいくつかある」

「どのような点が不自然なんですか？」

「いろいろとあるんだがな。まずは、火をつけたときのことだ。クローゼットに保管されていた灯油を簡単に見つけれられたということが腑に落ちない。家族の証言によると、ポリ容器は目に付く位置に置いてあったということだから、奥まったところではなかったという供述内容との整合性は取れるが、犯行当夜は、家の中は暗かったはずだ。簡単に見つけれられるとは思えない」

「そうですね。そもそも、気が動転して家の中をうろついていたにしても、はたしてクローゼットの中まで覗きますかねえ？」

「オレも、そう思う。それから、ライターを現場に残していることも釈然としないんだ。冷静に火をつけている割には、ライターをしまったことを覚えていないという。矛盾しているように感じるのだがな」

「そうですね」

「それとだな、下請けいじめの記録とやらについても不自然な点が多い。野島が死んでから半月以上も経ってから連絡を取ったというのがどうしても引っかかるし、記録を現場に捨てて来たというのも釈然としないんだよ。親のように尊敬していた野島から預かったものだ。いわば、形見みたいなものだ。普通なら、捨てずに持って帰るだろう。そもそも、そのような記録があったとして、野島が藤村に託すものだろうか？ 苦楽を共にした家族に託すほうが自然ではないのだろうか？」

「ボクも、そう思います」

「それと、中元がわざわざ家に呼んだというのも不自然と言えれば不自然だ。あくの強い中元のことだ。下請けいじめの記録程度のことなら、直接会社に呼びつけてもおかしくはないと思うのだが」

「言われてみると、そんな気がしますね」

「さらにもう一点、泥棒の仕業に見せかけるためにトイレの窓から脱出したというのも信じがたい。灯油をまいた上で火をつけたんだ。一刻も早く逃げ出したいはずだ。トイレの窓からだと、脱出するのに時間がかかる。それなのに、トイレの窓から逃げようなどという気になるものだろうか？」

「それも、栗原さんの言われる通りですね。それで、これからどうしますか？」

「とにかく、供述内容の裏を一つ一つつぶしていこう！ 時間はあまりないぞ。いつ藤村の意識が混濁するかわからない状態だからな」

「わかりました」

捜査手順を確認し合った二人は、師走の街に飛び出して行った。

懸命な捜査によって、供述内容に対する疑問を裏付けるような状況が、いくつか明らかにな

った。

何人かの法医学の専門家に話を聞いたところ、藤村がまいたとする灯油の量と遺体が燃えていた時間および遺体の状況との関係に疑問を呈する声が挙がった。

灯油をまき遺体に火をつけたとする時刻が夜の十二時を少し過ぎたあたりであり、消防車が駆け付けたのが十二時五十分ごろ、それから二時間で鎮火している。

それらの状況から、どんなに多く見積もっても遺体が焼かれていた時間は二時間半程度である。火力の強い窯で焼いたわけではなく、温度調節も行えない状況であった。そのような状況の中で、はたして二人分の臓器を完全に焼失させることができたのか疑問が残るという見解であった。

また、野島から託されたという中元の下請けいじめ記録に関しても、不可解な状況が明らかになった。野島の妻や二人の息子から話を聞いたところ、野島がそのような記録を作っていたことを知らなかったという答えが返ってきた。

会社の経営に関して苦楽を共にしてきた家族である。家族の知らないところで藤村に記録を託したということに対する疑問が膨らんだ。

さらに、犯行後にタクシーを拾って帰宅したという供述に対しても疑問が残った。タクシーを拾ったとする場所を営業エリアに含むタクシー会社や個人タクシーへの聞き込みを行ったものの、事件当夜、藤村を乗せたというタクシーは現れなかった。

これらの情報をもとに、栗原と山形は、二人だけの捜査会議を行った。

北川署内の会議室に顔を揃えた二人は、裏付け捜査の内容を整理し、疑問点をホワイトボードに書き出した。

「まず、遺体焼失の件ですね」

山形が、ホワイトボードに「遺体の焼失」という文字を記す。

何名かの専門家から集めた見解については、二人とも異論がなかった。

「まかれた灯油の量が、もっと多かった可能性があるな」栗原が呟いた。

「しかし、中元の家族は、保管してあった灯油はクローゼットの中の分だけだと言っていました」山形が、家族の供述内容を思い返しながら言葉を口にする。

それに対して、栗原が、必ずしも家の中に保管されていた灯油が使用されたとは限らないということを指摘した。

「それはそれで問題ないだろう。藤村自身が灯油を持ち込んだ可能性もあるのだから」

「なるほど」

「他の疑問点を考えようか。犯行後の足はどうだ？ 藤村を乗せたというタクシーが見つからないが」

「そうですね」相槌を打った山形が、ホワイトボードに「犯行後の足」という文字を記した。

「タクシーを使っていないとしたら、藤村は、どうしたんでしょうか？」

「キミは、どう思う？」

「そうですねえ。まず考えられるのが公共交通機関を利用したということですが、犯行を終え

た時刻はすでに終電時刻が終了していますから、利用できません。となると、レンタカーを借りたことが考えられますが」

「そうだな。藤村は、運転免許を持っていたな」

「はい」

「レンタカーを借りたとすると、灯油を持ち込むことは可能だな」

「そういうことになります」

「藤村自身が灯油を持ち込んだのだとすると、彼は、始めから火をつけるつもりだったことになる。なぜなんだろう？」

「証拠隠滅を図ろうとしたのではないですか？」

「どのような証拠をだ？」

「自分にとって都合の悪いものを燃やしてしまおうとしたのではないのでしょうか？」

「しかし、都合の悪いものがあつたのなら、家に持ち帰って処分してしまえばよいのではないかね。火をつけることで、事件が早く発覚してしまうわけだし」

「そうですね。それじゃ、なんで火をつけたのですかね？」

「事件の発覚が早くなる危険を冒してでも火をつけなければならないケースはあるよ」

「どんなケースですか？」

「死因を隠すケースだ」

「死因を隠すですか？ でも、中元の死因が刺殺なのは明らかですし、徳田の遺体にも目立った痕跡がないために焼死という検視結果が出たのではないですか？」

「それは、臓器が完全に焼失していて、詳しい検視ができなかったからだ。臓器が消失していなかったら、違った検視結果が出ていたかもしれない」

「ということは、藤村は、遺体を完全に焼き切るために、始めから火をつけるつもりで中元の家に乗り込んだということですか？」

「その可能性も否定できない」

「なるほど、そうか」

「それとだな、後から現場にやって来た徳田に犯行を目撃されたという供述にも疑問が出てくるんだ。藤村は、家に入るときは玄関から入り、犯行後トイレの窓から逃げ出そうとしたとき鍵はかかっていなかったと言っていた。藤村を家の中に入れたときに、当然中元は玄関の鍵を閉めただろうから、その後徳田が中元宅にやって来たのであればトイレの窓から侵入したということになる。しかし、事件当時の徳田の状況から、すでに中元への殺害動機を持っていたとは考えられない。どのような目的でやって来たのかは不明だが、少なくともトイレの窓から忍び込む必要はない。堂々と玄関から訪問して、中元が不在であれば、そのまま帰ればいいのだから」

「ということは、どういうことですかね？」

「つまりだ。徳田の死についても、巻き添えなどではなく、明確な動機のもと殺された可能性も否定できないということだ。その場合、徳田は、事件当夜に中元の家呼び出されたことになる」

「なるほど」

「その場合、共犯者がいた可能性も出てくる」

「……」

「もう一度、徳田の身辺を洗い直したほうがいいな。藤村と徳田との間に接点が見つかるかもしれない。それと、藤村と共犯関係になりえる人物がいたかどうかについても調べてみよう」

「わかりました」

二人の今後の捜査方針が決定した。

## 2. 死に際の真実

今年も、残すところ半月ばかりとなった。

街中はクリスマスムード一色になり、浮かれ気分の人たちで溢れ返っていた。恋人同士、家族連れ、友人グループが、通りをそぞろ歩き、暮れゆく年の瀬を名残惜しむかのように楽しい時間を刻む。

どの顔も、笑顔で満ち溢れていた。

しかし、刑事たちにはクリスマスムードを楽しむ余裕などない。

年末になると犯罪が増える。年を無事に越したいという思いは人間誰しもが共通して持つものなのか、この時期は窃盗犯が激増する。そのたびに、刑事たちは犯人を追って街中に飛び出して行く。

北川署管内でも、師走に入って窃盗事件が多発していた。中でも、郵便局やコンビニを狙った窃盗犯罪が多い。

この種の犯罪は、比較的短期間のうちに犯人を検挙できるのであるが、刑事たちには席の暖まる暇もない。

そんな中、栗原と山形は、中元宅放火殺人事件の裏付け捜査に余念がなかった。

北川署も、猫の手を借りたいほど忙しい。本来であれば、一日でも早く裏付け捜査を終了し日々発生する事件の捜査に専念すべきなのだが、二人は真実を明らかにしたかった。

署長の福山も、二人から捜査報告を受けるたびに、「一日も早く本来の刑事一課としての捜査に戻ることを望んでいる」という本音を口にしつつも、裏付け捜査を続けることを容認してくれていた。もう一度藤村と徳田の身辺を洗い直すことについても、福山の許可を得ていた。

栗原と山形は、事件の早期解決への決意を胸に、藤村の妹の優子のもとを訪ねることにした。今日は日曜日であり、彼女の仕事も休みのはずである。

藤村が妹と暮らしていたアパートを訪ねた二人は、玄関のドアをノックした。

ドアから顔を出した優子に、栗原が「入院しているお兄さんのことで話を聞きたいことがある」と来意を告げる。

二人は、居間へ通された。

家の中は、整理整頓されていた。奥に仏壇があり、男女の遺影が祀られている。

二人は、じゅうたんが敷かれたフローリングの上に胡坐をかいた。記録係に徹するつもり山形が、手帳をめくり、まっさらなページを開ける。

お茶を運んできた優子に向かって、栗原は、仏壇に祀られた遺影のことを訊ねた。

「あちらにいらっしゃるの、亡くなられたご両親ですか？」

「はい」

「確か、お兄さんが十五歳であなたが十三歳のときに交通事故でお亡くなりになられたと聞いていますが、ご両親が亡くなられた後の生活は大変だったでしょうね」

「ええ」

「あなたとお兄さんとは、強い絆で結ばれているのでしょうか」

「あの、今日は、兄のことで話があるとか？」優子が、話を促した。

彼女の表情からは、突然アパートを訪ねてきた二人のことを警戒している素振りが窺えた。二人が何度か藤村の病室を訪ね尋問を繰り返していたことは、藤村自身や病院関係者の口から優子の耳にも入っているのであろう。

そんな優子の表情を目にした栗原は、藤村が事件に関する供述を始めたことは知らないのではないかと感じていた。

その前提で、事件に関する情報を引き出すための質問を繰り返す。

「失礼しました。実はですね、私たちは中元義則さんという方の自宅が放火され、焼け跡から二体の焼死体が見つかった事件のことを調べているのですが、そういう事件があったことはご存じでしたか？」

「いつ頃のことですか？」

「今年の五月二十一日のことです」

「記憶にないです」

「そうですか。中元義則さんという方についても、ご存じありませんか？」

「ナカモトヨシノリさん？ どういった方ですか？」

「中元部品工業という会社の社長だった人です。中元部品工業は、野島金属工業と取引関係にありました。野島金属工業という会社は、ご存知ですよ？」

「はい。兄が勤めていた会社です」

「お兄さんからは、中元社長のことを何か聞いておりませんか？」

「いいえ、特には」

「そうですか。ちなみに、徳田裕一さんという方はご存知ですか？」

「えっ？ さあ……」

優子が、不意を突かれたかのような表情を浮かべた。

一瞬の表情の変化を見逃さなかった栗原が、「ご存じなのですか？」と問い質す。

「いいえ、知りません」

「そうですか。実は、二体の焼死体は、今言った中元さんと徳田さんだったのです」

「……」

「その件で、お兄さんからお話しを伺っておりましてね。お兄さん曰く、その事件の犯人は自分だということですよ」

「えっ！ 兄が、そんなことを言ったのですか？」

大きく目を見開いた優子の顔面が蒼白になった。

表情の変化に戸惑いながらも、栗原が質問を続ける。

「心当たりがありましたか？」

「そんな……。あるわけありません」

「そうですねあ」

「それで、兄はなんと？」

「あなたもご存じでしょうが、野島金属工業は三月に倒産し、その一ヶ月後に社長が自殺をしています。お兄さんは、中元さんがその原因を作ったと思っていたようでして、そのことに関して一言謝らせたくて中元さんの家へ乗りこんで行ったそうなのですが、邪険な態度を取られたので、持ち歩いていたナイフで中元さんを刺殺してしまいました。その様子を、なんらかの目的で中元さんのお宅にやって来た徳田さんに目撃され、揉み合ううちに徳田さんのことも殺害してしまいました。それで、気が動転し、中元さんの家にあった灯油をまいて火をつけたという供述を、お兄さんはされました」

「……」

「驚かれたようですね」

「はい」

「失礼ですが、本当に事件のことはご存じなかったのですか？」

「ええ」

「そうですか。ところで、事件のあった五月二十一日ですが、あなたは何をされていましたか？」

「夜のことですか？」

「夜？ 別に、夜だけとは言っていません。一日の行動を聞いているのです」

「あっ……。あの、五月二十一日って何曜日ですか？」

「水曜日です」

「それでしたら、昼間は会社にて、夜は七時半頃にはアパートに戻っていたと思います。会社は夕方の五時半に終わりますから、晩ご飯の買い物をして家に帰ってきたら、いつも七時半頃になるんです」

「半年以上も前のことなのに、はっきりと覚えていらっしゃいますね？」

「その頃は、会社を休んだ記憶も帰りが遅くなった記憶もありませんので」

「そうですか。それで、その日あなたが会社から戻られたとき、お兄さんは家にいましたか？」

「さあ、よく覚えていません」

「あなたの記憶では、その頃は会社を休んだり帰りが遅くなったりしたことはなかったのですよね。毎日、会社帰りに晩ご飯の買い物をして帰るともおっしゃいました。それは、お兄さんと一緒に食べる晩ご飯をあなたが準備しているということなのでしょう。もし、お兄さんが晩ご飯時にいないときがあったら、あなたの記憶に残っているのではないですか？」

「兄の帰りが遅いときもありましたし、そんなときも一応兄の分も作っておきますので」

「そうですか。では、最後にもう一度確認しますが、徳田裕一さんという方のことはご存じ

なかったのですね？」

「はい」

「わかりました。お休みのところ、突然お邪魔して申し訳ありませんでした。お兄さんが犯行を自供されていますので、妹のあなたにもいろいろとお聞きしなければならないことがあります。また伺うと思いますので、そのときはご協力下さい」

そう言葉を残して、栗原と山形は、優子のもとを辞した。

翌日、栗原は、五月二十一日の優子の勤務状況について、会社に確認を行った。

優子は、家電や精密機器などに使用される部品のメッキ加工を行う会社で働いており、都内の工場に配属されていた。社員の勤怠管理は本社の総務部が行っているということであり、栗原の問い合わせに対して、総務部の担当者は、五月二十一日は始業時刻の朝九時に入社して終業時刻の夕方五時半に退社しているという返答を行った。

優子の証言通り、事件当日は、日中は社内で勤務し定時に退社していたことが確認できたのだが、栗原は、彼女が事件に関して何か知っているのではないかという疑念を捨てきれなかった。

昨日のやり取りの中で、お兄さんが事件についての供述を始めたとき「兄が、そんなことを言ったのか？」という言葉が返ってきたことが不自然に思えた。兄の犯罪に驚いたのならば、「兄がそんなことをしたのか？」と聞き返すはずである。

五月二十一日の行動を確認したときに「夜のことか？」と聞き返してきたことも、頭の中で引っかかっていた。

徳田のことを知らないときとの反応にも、不自然さを感じる。

山形も、同じような理由で、優子に対して疑念を抱いているようであった。

栗原と山形は、徳田と藤村兄妹との関連性についての掘り下げ捜査を行うことを決めた。

その頃、病室で向き合う藤村と優子の姿があった。

今日の優子は、仕事に集中できなかった。兄が犯行を自供したということを告げられたことが頭から離れず、引きずっていた。メッキ加工ラインの作業を担当していたが、ミスを繰り返し、そのたびに上司から怒鳴られた。

やっとの思いで終業時刻を迎えた優子は、飛び出すように退社し、病室に駆けつけた。

藤村は、日に日に痩せ細っていた。食事の量も減っていた。

藤村自身や主治医からは詳しい病状を聞かされていなかったが、このような状態が続けば先々長くはないのではないかという思いを優子は抱いていた。

彼女にとって、藤村は、心の支えでもあった。

両親が急逝した後も、藤村は自分を犠牲にして二人の生活を支えてくれた。兄の犠牲のお陰で、優子は高校に進学でき、安定した会社に就職できたのである。

優子にとって、藤村は、兄以上の存在であった。

そんな藤村がこの世から消えてしまうことなど、優子は考えたくもなかった。いつか治療が功

を成し藤村の顔にも血色が戻るものと信じていた優子は、藤村の前では努めて明るく振る舞ってきた。

しかし、今日の優子は、明るく振る舞うことができなかった。

病室で藤村と向き合った優子は、早速、刑事が訪ねてきたことを口にした。

「昨日、家に刑事が訪ねてきたの」

栗原たちが優子のもとを訪ねたことを聞かされた藤村は、戸惑いの表情を浮かべた。視線を、優子から逸らす。

そのまま、喉から無理矢理声を出し出すように、言葉を発した。

「何の用で来たんだ？」

「それがね……、中元さんという人の家が放火されて焼け跡から二人の遺体が見つかった事件で……、お兄ちゃんが犯行を自供したって言っていたわ」

「……」

「本当なの？」

「……うん」

「どうして？」

「オレは、あいつのことが許せなかった。だから、殺して火をつけた。でも、あるとき病室に刑事が訪ねてきて……。刑事は、オレのことを疑っているんだ。最初は黙っておこうかと思ったんだけど、隠し通せるはずもないしな。それに、こうやって病室のベッドに縛り付けられていると、あいつらの顔が浮かんできちゃうんだ。胸が苦しくなっちゃって、楽になるためには、話しちゃうしかないのかなと思って……」

「でも、お兄ちゃん。それは違う……」

「ごめん、優子。もう、それ以上何も言うな。何も言わないでくれ！」

「お兄ちゃん！」

「いいか、優子。お前は、事件のことは何も知らない。お前の知らないところで事件は起こったんだ。もしオレがこのことで捕まってニュースになるようなことがあったとしたら、お前は犯罪者の妹ということで後ろ指を差されることになるかもしれないけど、例え、どんな状況になっても、お前はお前で力強く、幸せに生きてくれ！」

涙を浮かべた優子が、激しく首を振る。

そんな優子に弱々しい笑顔を振り向けながら、藤村が、再び言葉を発した。

「でもな、優子。オレは、後悔していないんだ。確かにとんでもないことをやってしまったのかもしれないけど、オレにとっては意味のあることだったんだ」

「……」

「優子、お前に一生の願いがある。これからも刑事がお前のもとを訪ねてくると思うけど、事件のことについては、余計なことは何もしゃべらずに何も知らなかったと言い続ける！　そして、一日も早く今回のことは忘れて、幸せな人生を歩んでくれ。お願いだ！」

「お兄ちゃん……。そんな、私……」

「優子、約束してくれ」

藤村が、弱々しい動作で左腕をベッドから出し、小指を立てて優子の目の前に掲げた。

優子が、泣きながら右手の小指を藤村の小指に近付ける。

藤村の小指が優子の小指に巻きついた。藤村が、小指の力を込める。

藤村は、渾身の力を振り絞って、体内に残されたエネルギーを巻きつけた小指に注いだ。

栗原と山形は、捜査を急いだ。

藤村の主治医から聞いた話によると、彼の容体は悪化の一途をたどっているということであった。このままの状態が続けば、年内持たない可能性もあるということである。

栗原は、真実を明らかにしたかった。

真実を知る鍵を握るのは藤村である。そして、藤村は、明らかに何かを隠している。

裏付け捜査を進めながら、藤村の口から真実を引き出さなければならない。

この思いは、山形も同じであった。

捜査は、一分一秒を争うものとなった。

栗原と山形は、藤村兄妹の過去を調べることにした。

二人は、徳田の死も偶然ではないのではないかという疑いを捨てきれずにいた。

偶然ではないとすれば、徳田は、藤村によって中元宅に呼び出され、中元とともに殺害されたということになる。そうであった場合、徳田に対してもなんらかの動機が存在したはずだ。

藤村の交流範囲は狭い。動機が存在したのならば、藤村自身に関する何か、そうでなければ妹に関する事だろう。自殺した野島と徳田の間にはいっさいのつながりがないことは、過去の捜査で明らかになっていたからだ。

二人は、藤村兄妹の過去を徹底的に調べ上げた。

そしてついに、徳田との接点を発見した。

以前徳田が店長を務めていた飲食店で、優子がアルバイトとして働いていたことが判明した。当時高校生だった優子は、一年半もの間、徳田の下で働いていた。

当時のことを知る人間から聞き出した話によると、優子は、徳田に大変懐いていたということだった。二回り近くも歳の離れた徳田のことを父親のように思っていたようであり、徳田もそんな彼女のことを可愛がっていたと証言者は口にした。

さらに徳田が住んでいたアパートの住人から、事件発生の少し前に、優子らしき女性が徳田の家から出てくるところを目撃したという情報が寄せられた。妻子が別居していた時期であり、目撃証言によると、優子は、泣きながら玄関から飛び出して行ったということだった。

藤村と徳田に関しては直接的な結びつきを見つけることはできなかったが、優子を介して徳田のことを知っていたのではないかと栗原たちは推測した。

さらに、藤村による計画的な犯行を疑わせる証拠が発見された。事件当日、藤村がレンタカーを借りていたことが明らかになったのだ。一泊二日の予定で借りられており、予定通り事件翌日に返却されていた。

レンタカーショップに残っていた記録により、藤村がレンタカーを走らせた走行距離も明らか

になった。走行距離は、藤村のアパートから中元宅までの往復と藤村のアパートからレンタカーショップまでの往復を合計した距離に極めて近い数字であった。

さらに、記録には、後部座席のシートに石油系の液体が付着した跡があったことも記されていた。幸いシミにならず匂いも消えたので、使用者である藤村に費用請求をしなかったということだった。

これらの情報を入手した二人は、犯行が計画的なものであり、優子も関与しているのではないかという疑いを強めた。

アルバイト時代の優子が徳田に懐いていたという証言や、事件直前に優子らしき女性が徳田の家から泣きながら飛び出してくるところを目撃したという証言があることより、アルバイトを辞めた後も優子と徳田との関係は続いており、最近になって二人の間に感情のもつれのようなものが発生したのではないかということが推測できた。

藤村が中元に対して恨みを抱いていたことは明らかであり、加えて優子あるいは藤村兄妹双方が徳田に対して殺害動機を持っていた場合、徳田による中元殺しの凶式に見せかけて二人を殺害する計画を立てたとしてもおかしくはない。

その場合、徳田を中元宅に呼び出す必要があるのだが、中元には徳田を家に呼ぶ理由がなく、面識のない藤村からの誘いに徳田が乗るとは考えられない。しかし、優子なら呼び出すことができる。

藤村の周囲に彼女以外に徳田と関係のある人物が見当たらないことを考えても、優子が共犯であった可能性が高い。

兄妹は、固い絆で結ばれている。

栗原と山形は、兄妹が協力して中元と徳田を殺害し、家に火を放ったという仮説を打ち立てた。

そして、真実を確かめるために、再び藤村の病室へと向かった。

藤村の容体は悪化していた。意識はあったが、熱が下がらず、呼吸の苦しい状態が続いていた。

主治医は、二人に対して、「藤村を刺激させるような話はしない」、「主治医が同席する」という条件のもと、病室での取り調べを許可した。

病室へ入った二人は、ベッドの横に置かれたパイプ椅子に腰かけた。主治医は、二人から少し離れた場所に腰を下ろす。

藤村の顔を覗き込むように、栗原は語りかけた。

「私たちが妹さんのところへ伺ったことは、ご存知ですよ？」

「はい」

「あれから、あなたのことや妹さんのことを色々と調べさせてもらいました。その結果、妹さんと被害者の一人である徳田裕一さんとの間に関係があることがわかりました。妹さんが高校生のときに徳田さんが店長を務めていた店でアルバイトをしており、アルバイトを辞めた後も二人は関係があったようですね」

「……」

「それと、事件当夜、あなたが火災現場から自宅アパートまでタクシーで戻られたという件ですが、あなたは、あの日レンタカーを借りていますね。ここに記録があります」

栗原は、レンタカーショップで貰ったレンタル記録のコピーをかざした。

藤村が、弱々しい視線を送る。

「この記録に書かれている走行距離は、あなたのアパートと中元さんの家を往復した距離およびあなたのアパートとレンタカーショップを往復した距離の合計とほぼ同じです。さらに、後部座席のシートに石油系の液体が付着した跡があったことも記されています。灯油のような匂いが残っていたという証言も得られています」

「……」

「藤村さん。私たちは、真実を知りたいのですよ。私たちは、あなたと妹さんが協力して犯行に及んだのではないかと考えています。徳田さんには中元さんの家を訪れる理由などなく、ましてやトイレの窓から侵入する理由などありません。誰かに呼び出されて現場に行ったとしか考えられないのです。しかし、中元さん自身に徳田さんと呼ぶ理由はなく、面識のないあなたにも徳田さんと呼び出すことはできないでしょう。そして、あなたの周りには、妹さん以外に徳田さんと関係のある人物はいない。ということは、あなたと妹さんが協力して犯行に及んだのではないかと考えざるを得ないのですよ」

「……」

「あなたは、始めから火をつけるつもりで中元さんの家に行ったのではないですか？」

「……」

「藤村さん。前にも申し上げましたが、今回の事件は、既に被疑者死亡のまま送検され結審しています。わが国には一時不再理の原則があるので、例えあなたたち兄妹の犯行だということが証明されたとしても、あなたたちを起訴するのは難しいでしょう。たとえそうであっても、真実は明らかにしなければならないと思うのですよ。藤村さん。お願いします。真実を話してくれませんか？」

栗原は、熱く語りかけた。

藤村が、栗原の顔に視線を合わせる。熱のせいで充血し腫れぼったい瞳であったが、視線は真っ直ぐに栗原に向けられていた。

しばしの後、藤村が、弱々しく口を開いた。

「刑事さん。始めから中元さんの家に火をつけるつもりでポリ容器に入れた灯油をレンタカーで運んだのは事実です。ただ殺すだけでは気が済まなかったから……。でも、妹はいっさい関係がありません。徳田さんと妹との間に関係があったことは知りませんでしたし、前にも言いましたように、中元さんを殺害した現場に偶然徳田さんがいて、揉み合いの末、殺してしまったのです」

「前に話しを伺ったときには、最初は中元さんを殺すつもりじゃなかったが中元さんの態度に腹を立てて気がいたらナイフで刺していたということでしたが、そうになると、始めから火をつけるつもりで乗りこんで行ったという話と矛盾しますね」

「……中元さんは、最初から殺すつもりでした」

「そうですか……。藤村さん。本当に、それが真実ですか？」

「はい……。真実です」

藤村の息が荒くなる。

そのとき、離れた場所に座り様子を見ていた主治医が椅子から立ち上がり、栗原たちに向かって「そろそろ終わりにしてください」という言葉を口にした。

主治医の指示に従った栗原と山形が、ベッドの中の藤村に一礼し、パイプ椅子から立ち上がる。

そんな二人を、藤村が呼びとめた。

「刑事さん」

二人が、藤村のほうに振り向く。

「刑事さん。すみません……。約束、守れそうもなくて」

「約束？」

「以前刑事さんに、あなたも諦めることなく病氣と闘ってもらいたいと言われましたが、その約束、守れそうもないです」

「藤村さん……」

「すみません」

「そんなに簡単にあきらめちゃダメだ！ ここにいる先生も、可能性に託して毎日頑張っているんだよ。私たちも、キミが回復するように日々祈っているんだ。それを、肝心のキミが諦めてどうするんだ！」

「そうですね……」

「刑事さん、そろそろ」

主治医に促された栗原は、藤村に向かって軽く頷き、山形と共に病室を後にした。

栗原と山形は、優子が勤務する会社のことを調べることにした。

二人の頭の中に、徳田の死因に関してスッキリとしないものがあつたからである。検視報告書では焼死となっていたが、青酸カリなどの毒物を飲まされた可能性も否定できないとも書かれていた。

優子は、メッキ加工の仕事をしており、メッキ加工には青酸カリが使用される。

青酸カリなどの毒物や劇物は、法律で使用量や保管方法などを厳しく管理することが使用する側に求められているが、管理がずさんなところも多い。

優子が勤務する会社でも、五年前に優子が勤務する工場とは別の工場が厚生労働省の立ち入り検査を受け、帳簿上の青酸カリの在庫量と実際の在庫量が合わないことを指摘され、処分を受けていた。優子が工場から青酸カリを持ち出し、工場側がそのことに気づいていないという可能性も否定できない。

二人は、署長の福山に協力を仰ぎ、優子の勤める工場への立ち入り検査を行うよう厚生労働省に働きかけることを計画した。

### 3. 真実(まこと)の愛

そんな矢先、栗原のもとに衝撃的な連絡が飛び込んできた。クリスマスが過ぎ、今年も、残すところあと五日と迫った日のことであった。

朝一番に、年内で裏付け捜査に目途を付けるようにと署長から発破を掛けられた栗原と山形が、一日の捜査活動方針を確認し合い署を出ようとしたときに、栗原のもとに一本の電話が掛かってきた。

電話の相手は、藤村の主治医だった。

主治医が、事務的な口調で用件を告げる。

「今日の朝方、藤村雄太さんがお亡くなりになりました」

「えっ！」

驚きで言葉を発せられずにいる栗原に対して、主治医が、藤村が亡くなったという言葉の繰り返した。 昨晚容体が急変し、そのまま息を引き取ったということだった。

今現在、病室には優子が付き添っているということである。

連絡を受けた栗原は、山形を連れて病院に向かった。

病室で、茫然とした表情で藤村の亡骸を見つめ続ける優子の姿があった。

亡骸の顔にかけられたガーゼが、カーテンの隙間から射し込む日の光に照らされ、白さを際立たせる。

病室の中には、厳かな空気が漂っていた。

病院に到着した栗原と山形は、静かに病室の扉を開けた。我に返った優子と視線が合う。互いに、無言で礼を交わした。二人が、ゆっくりと藤村の亡骸に近づく。

優子が、顔にかけられたガーゼを、そっとめくった。

そこには、思いのほか穏やかな死に顔があった。

栗原は、主治医から、苦しい闘病生活であったことを聞いていた。抗がん剤を投与するたびに嘔吐し、ベッドの中でのたうちまわる。病状が進むにつれて、意識が朦朧とし、呼吸が苦しくなる。

「早く死にたい」と、うわ言のように漏らしていたことが何度もあったということだった。

しかし、目の前に見る死に顔は、想像を絶する苦痛の連続だった闘病生活を感じさせないほど穏やかな表情であった。

栗原は、不思議な感情にとらわれていた。

藤村には、生きていて欲しかった。真相が明らかになるまで生き長らえていて欲しかった。真相が明らかにならないまま藤村があの世界に旅立ったことは、刑事としての敗北を意味するものだと感じていた。

それとは別に、藤村が苦しい闘病生活から解放されて穏やかに旅立ったことに対して胸を撫で下ろしたいという感情も芽生えていた。

病室に足を運ぶたびに、やせ衰え、苦痛にのたうち回る藤村の姿を見てきた。主治医からも、

これ以上手を施しようがないという言葉が聞かされていた。

ようやく人生の二回り目を迎えようとする、これからいくらでも実りの多い時間を謳歌できるはずの若い命が、苦しみながら消え去ろうとしている。本当に助からない命であるのならば、早く苦しみから解放させてあげたい。

真相を追い続ける刑事としての心と人を想う人間としての心との狭間で、栗原は、葛藤を続けていた。

しばしの時間、胸の中で亡骸に言葉をかけ続けていた栗原は、火葬だけの直葬形式で弔うつもりだという優子の言葉に頷き、山形とともに、そっと病室を後にした。

栗原は、藤村の死を署長に報告した。

それとともに、署内から、彼の死を持って藤村に関する捜査は終了すべきであるという声が上がった。藤村が犯行に関与していることは明らかであり、供述内容と裏付け捜査の結果を県警に報告し、あとは県警の判断に任せるべきではないかという意見であった。

署長も、その意見に賛成であり、藤村に関する捜査を終了するよう、正式な指示を与えた。

どこか釈然としないものを抱えていた栗原と山形であったが、これ以上他の捜査員たちに迷惑を掛けることも許されず、捜査を打ち切ることにした。

年が明けた。

年末年始の帰省に合わせて水が引くように人気のなくなった都会の街にも、徐々に人の流れが戻り始めた。人々の顔には、思う存分休養を取った後の気だるさの中に、新たな一年を踏み出す決意を胸に秘めたエネルギーに満ち溢れた表情が映し出されていた。

刑事たちの年末年始の休みは交替制であった。世のサラリーマンたちのように、まとまった連続休暇を取ることはできない。

栗原も、交替制で得た休みを、いつもと同じように寝正月で決め込んだ。

年末にピークを迎える犯罪件数も、正月を迎え、一挙に件数が減る。

多発する窃盗事件や傷害事件などへの対応に追われていた捜査員たちも、年が明けて最初の半月ほどは気の休まる時期であった。

必然的に、署内で待機している時間が長くなる。

栗原は、署内で待機をしながら、自分の中では未だに解決していない中元宅放火殺人事件のことを思い返していた。

そんな中、栗原に、正月休み以降初めての公休日が巡ってきた。

公休日といえども、犯罪が多発しているときや大事件が発生したときなどは呼び出されることもある。そういう場合は、休日返上で捜査に当たらなければならない。

しかし、今の時期は犯罪件数が少なく、大事件も発生していない。

電話で呼び出されることもないであろうと思った栗原は、休みを利用して藤村優子に会いに行くことを思い立った。

栗原の頭の中には、中元宅放火殺人事件の真実に関して、ある考えが芽生えていた。それを、優子にぶつけてみたかったのである。

県警も、再捜査にはためらいがあるようであり、あれから返答がない。供述をした本人も死亡している。このまま、うやむやのうちに片付けられる可能性が高まった。

栗原も、再捜査を願う気持ちはなかった。今さら死者の名誉を冒瀆する必要などないのではないかと考えていた。

しかし、犯人の汚名をかぶり起訴された徳田に関して言えば、死者の名誉を回復すべきであるという思いもあった。栗原の胸中に、真実を明らかにした上で、自分の中だけで徳田の名誉を回復してあげたいという思いが湧いていた。

そのために、自分の考えを優子にぶつけてみたい。それによって真実が明らかになる保証はないが、やらないと後悔する気がしていた。

栗原は、公休日の前日に、優子に電話した。

電話に出た優子は、明日、藤村の遺骨を持って両親の眠る神奈川県内の墓地に行くということに彼に告げた。両親の墓に藤村の遺骨を納骨するということであった。

栗原は、墓の所在地を優子に問うた。納骨の時間も聞き出す。

栗原は、藤村家の墓に足を運び、そこで優子に対して自分の考えをぶつけてみることを決意した。

海に面した丘の上に立つ墓地に、海から吹く寒い風が吹きつけていた。ときより、小雪も交じる。

そんな中、藤村家の墓と書かれた墓石の前で一人佇む優子の姿があった。

つい今し方納骨が終わり、石材業者が引きあげていったばかりである。

墓前に花を手向け、線香に火を付ける。コートの襟を立て、立ちつくしたまま祈りを捧げていた。

ふと、後ろに人の気配がした。

優子が、そっと後ろを振り返る。

そこには、栗原の姿があった。

「お出でになるとおっしゃってましたわ」優子が微笑んだ。

「私も、藤村さんの墓を参りたくなりましてね。今日は偶然公休日でしたので、来させてもらいました」

そう言葉を返した栗原は、来る途中で買った花を墓前に立向け、両手を合わせた。

墓石の正面の位置を栗原に譲った優子も、再び手を合わせる。

二人は、ほぼ同時に祈りを終えた。

しばしの時間、二人の間を沈黙が支配する。

やがて、沈黙に耐えかねたように、栗原が口を開いた。

「今日は、あなたに話したいことがあって、お墓まで来させてもらいました」

栗原と優子の視線が合う。

栗原は、言葉を続けた。

「お兄さんの供述内容を県警に報告しました。しかし再捜査されることはないでしょう。私も再捜査されることを望んでいません。ただ、真実は明らかにしたいと考えています。死んだお兄さんも、真実が明らかになることを望んでいると思っています。そして、犯人として起訴された徳田さんの名誉も回復しなければならないと考えています」

「……」

「最後に私たちが病室のお兄さんと会ったとき、お兄さんは、最初から中元さんを殺害するつもりだったということと家に火をつけるつもりだったということを確認しました。しかし、徳田さんに関しては、偶然現場に居合わせた徳田さんと揉み合いになり殺害したという供述は変えませんでした」

「……」

「でもね、優子さん。私はね、お兄さんが誰かをかばって死んでいったような気がしてならないのですよ」

「誰かをかばって？」

「そうです。確かに、お兄さんには中元さんを殺害する動機があります。中元さんが冷たい仕打ちをしたことにより、勤めていた会社が倒産し、親のように慕っていた社長が自殺しました。しかし、いくら調べても、お兄さんと徳田さんとの間にはつながりがありませんでした。一方、あなたと徳田さんとの間にはつながりがあります。事件直前に泣きながら徳田さんの家を飛び出すあなたの姿も目撃されています。それと、徳田さんに関しては、状況的に自分の意思で中元さんの家に忍び込んだと考えるには無理があり、誰かに呼び出された可能性が高いのです。しかし、徳田さんと面識のないお兄さんが呼び出すのは極めて難しいことです」

「……」

「徳田さんと関係のあったあなたなら、徳田さんが中元さんに対して恨みを持っていたことを知ることができ、また徳田さんを中元さんの家に呼び出すことができたのではないかと私は考えています」

「……」

「今回の事件は、中元さんと徳田さんに恨みを持つ者が協力し合って、徳田さんの犯行に見せかけて二人を殺害したと考えることも可能です」

「……」

「優子さん。徳田さんの検視報告書には、死ぬ直前に青酸カリなどの毒物を飲まされた可能性があるということが書かれていました。優子さんは、確かメッキ加工の仕事をされていたよね」

「はい」

「先ほども言いましたように、捜査は私たちの手を離れており、再捜査にもならないと思っています。私は、ただ真実を明らかにしたいだけなのです。お兄さんは明らかに誰かをかばっておられると思います。優子さん、あなたはどう思われますか？」

「刑事さんは、何もかもを見通した上で、今日、ここに来られたのでしょうか？」

「未だわからないことも、たくさんありますが」

「私も、真実を明らかにしなければならないと思っています」

「……」

「刑事さん。これを、刑事さんに託します」

そう言うと、優子が、バッグから分厚い封筒を取り出し、栗原に差し出した。

栗原が、封筒を手に取り、優子に問い質す。

「これは何ですか？」

「今回の事件の真相を記した手紙です。いつか、こういう日が来ると思っていましたので……  
。この中には、兄が書いた手紙も入っています」

「お兄さんが書いた手紙？」

「ええ、兄が私宛に書いた手紙です。それもお読みになれば、今回の事件の真相を理解していただけると思います」

「これを、私が預かってよいのですか？」

「お願いします……。今、ここでお読みにならないのですか？」

「そうですね……。それでは、読ませてもらいましょうか」

そう言うと、栗原は、慎重な手つきで封筒を開封し、中身を取り出した。

封筒の中には、二通の手紙が入っていた。一通は優子の筆跡で書かれており、もう一通は藤村が優子に宛てたものであった。

栗原は、優子の書いた手紙を手を取った。七、八枚ほどのレポート用紙に、びっしりと文字が埋められている。

「それじゃあ、読ませてもらいます」栗原は、優子に声をかけた。

「お願いします」寂しげな表情で頷いた優子が、手にしたペットボトルのふたを開け、飲み口に口を付けた。

そのとき、栗原の脳裏に電流が走った。

「止めろ！ 優子さん！ 飲むんじゃない！」栗原は、優子に向かって叫び声をあげた。

その声に耳をふさぐかのように、優子が、ペットボトルの中身を一気に喉の奥に流し込む。

優子が、その場に崩れ落ちた。顔を歪め、苦しそうに胸をかきむしる。

「しっかりしろ！」栗原は、優子の肩を抱き起こし、顔を近づけた。

「け、い、じ、さ、ん。お、ね、が、い、し、ま、す」優子が、絞り出すように声を発する。

「何をお願いしたいんだ？」栗原が、優子の顔を抱え、揺さぶる。

しかし、答えを口にすることもなく、優子のまぶたは閉じられた。

安らかな表情を浮かべたまま。

栗原は、懐から携帯電話を取り出し、一一〇番通報した。身分を明かした上で、目の前で起こったことを、かいつまんで説明する。

警察の到着を待つ間、栗原は、優子から預かった二通の手紙に目を通すことにした。先ほど読みかけた優子の書いた手紙を再び開く。

そこには、次のような内容で、事件の真相や優子の気持ちが綴られていた。

この手紙がどなたかに読まれるころ、私は、既にこの世にはいないでしょう。

先に旅立った兄のもとに行っております。

これから書くことは、昨年五月二十一日に中元義則さんの自宅が放火され、中元義則さんと徳田裕一さんの遺体が見つかった事件の真実です。

あの事件で、徳田を殺害したのは私です。

徳田とは、六年前に、アルバイトで働いていた飲食店で知り合いました。

両親のいない私は、店長として周囲の人たちを引っ張る徳田のことを、父親のような頼もしい存在に感じていました。

そんな私のことを徳田も可愛がってくれ、高校を卒業してからも、メールのやり取りなどをしていました。

あるとき、徳田が、勤めていた会社をリストラされ、家族も家を出て行き寂しい思いをしているという話を人伝に聞いて、私は、励ますために彼の家に行きました。

そんな私を、徳田は歓迎してくれました。

そして、私が二度目に徳田の家に行ったときに事件が起きました。

酔った徳田が、私に乱暴したのです。

私は、徳田に犯されました。

そのとき、私は、徳田に殺意を覚えました。それも、ただ命を奪うだけではなく、名誉を汚すような形で徳田のことを葬りたいという感情にとらわれました。

そして、私は計画を立て、実行に移しました。

徳田から中元に人生をメチャメチャにされたという話を聞いていた私は、彼を中元の家呼び出し、そこで二人ともを殺害することで、徳田が中元を殺して自ら命を絶ったように見せかけようという計画を立てました。

中元については、兄の会社を倒産に追い込み、兄が尊敬していた野島社長を自殺に追いやったということで兄が恨んでいるはずだと思い、殺害することに躊躇はありませんでした。

計画を実行に移すために中元に近づく必要のあった私は、彼がエレクトロアートというバーに足しげく通っているという情報を入手し、そのバーで偶然を装って彼に近づきました。

そのときに、中元の家に行ってみたいと彼を誘惑したのです。

中元は、妻子が家を空ける日を指定して、私に家に来るように言いました。

それが、昨年五月二十一日だったのです。

その日の夜に家に行くことを約束した私は、徳田に対して中元の家へ乗りこんで言いたいことを言うようにけしかけ、事件当夜、私が中元の家に入った後に、鍵を開けておいた玄関から徳田が侵入する手はずを整えました。

私の計画では、徳田が乗り込んできた後、二人の間を仲裁するように装い、会社から持ち出した青酸カリ入りの飲料を二人に飲ませて殺害するつもりでした。

また、徳田の犯行に見せかけるために、予め徳田の指紋の付いた青酸カリ入り飲料の入ったペ

ットボトルと遺書とも読める人生に失望したという内容の徳田直筆の文章を手に入れていました。

ところが、私が中元の家に着いたとき、玄関の鍵は開いており、中で中元が胸から血を流して死んでいました。

驚いた私は、外で待機していた徳田を呼び入れ、事後対応を彼に相談する振りをして青酸カリ入りの飲料を徳田に飲ませました。

徳田が倒れたのを確認した私は、当初の予定通り徳田の指紋が付いたペットボトルと徳田の直筆文章を現場に残し、中元の遺体のそばに落ちていたナイフに徳田の指紋を付け、その場を立ち去りました。

中元が殺されていた件については、私は、犯人と思われる人物を目撃しています。私が中元の家に着く直前に、一人の男が家から出てきました。

その男の顔には、見覚えがあります。エレクトロアートで、二度ほど中元と二人で飲んでいる姿を目にしました。

後で中元に聞いたら、「ギャンブル好きな奴で、会社のカネに手を付けて首が回らなくなっているところを、金を貸して助けてやった」と話していました。

男が返済の約束を守らないので、「期日通りに返済しないのなら会社に訴える」と言ったということも聞きました。

火事のことですが、兄がやったと聞いて驚きました。

詳しい経緯は、兄が書いた私宛の手紙に記されていますので、私の手紙の中では記しません。

最後に、兄に対する気持ちを書きます。

兄は、私が十三歳のときに両親を失って以来、自分を犠牲にして私のことを守ってくれました

私は、いつしかそんな兄のことを、兄としてではなく一人の男性として見るようになっていました。

兄の喜びは私の喜び、兄の苦しみは私の苦しみです。

私の心の中は、常に兄に対する想いで一杯でした。

単なる恋心以上の、永遠の愛のような感情を持ち続けていました。

叶うことはないだろうけれども、私の女としての初めてのモノも兄に捧げたいと思っていました。

それを、徳田に踏みにじられました。

徳田のことは、死んでも許すことはできないでしょう。

私は、決して後悔していません。

二十二年間という短い生涯でしたが、あの世でまた兄と巡り合い、永遠に暮らして行きます。

地獄に行くのかもしれませんが、兄と一緒になら、どんな苦難でも乗り越えられます。

最後に一つだけわがまを言わせていただきたいのですが、できましたら、私の骨を両親と兄が眠るこの墓の中に入れてください。

自分でやれないことが歯がゆいのですが、この手紙を読んでいただいたどなたかに、不躰なが

らお願い申し上げます。

優子の書いた手紙に目を通した栗原は、続けて、藤村雄太が妹の優子に宛てた手紙を開いた。そこには、次のような内容が記されていた。

優子へ。

この手紙をお前が目にするころ、ひょっとしたら、オレは、もうこの世にはいないのかもしれない。

お前も、あの事件にオレが関与していることを知って、ひたすら驚いていることと思う。

お前にだけは真実を告げたくて、この手紙を残すことにした。

あるとき、オレは、偶然お前の日記を読んでしまった。

そのときに、お前のオレに対する気持ちや徳田から受けた仕打ち、そして徳田と中元を殺して徳田のことを犯人に仕立て上げるという計画のことを知った。

そのときのオレの気持ちは、一言で表すと、お前のことをどんなことをしてでも守り抜きたいと強く思った。

お前の心の痛みを一緒になって味わいたい、お前の想いも遂げさせてあげたい、でも、お前に犯罪者としてのレッテルは張らせたくなかった。

だからオレは、お前が計画を実行に移した後に偽装工作をすることにした。

そのために、徳田のことを徹底的に調べた。彼が愛用していた腕時計も盗み出した。

そして、事件当日、オレは徳田の格好をして、レンタカーでお前が計画を実行に移す予定時刻よりも早く中元の家に行き、そばの空き地にレンタカーを停めて、車の中から家を見張っていた。

しばらくして、お前が家の中に入り、少ししてから徳田も家に入り、そしてお前が家から出てきた。

計画通りに事が進んだのだと思い、オレは、オレの計画を実行に移した。

持ってきた灯油を玄関の中に入れ、徳田の格好をした姿を付近の通行人に目撃させた。

その後、居間で倒れていた中元と徳田の身体に灯油をまいた。徳田は、かすかに息をしていたみたいだったが、構わず火をつけた。

そのとき、青酸カリ入り飲料の入ったペットボトルは持ち帰った。

理由は、青酸カリが見つかるとお前に疑いが向くのではないかと考えたからだ。

それから後は、警察にも話した通り、玄関の鍵を閉めてトイレの窓から脱出した。徳田の仕業に見せかけるためだった。

徳田に関しては、お前と気持ちは同じだ。

もしおまえが手を掛けなければ、代わりにオレがやっていたと思う。

一つだけ、オレの本心を伝えておく。

中元に関しては、最初は恨む気持ちがあったが、死ぬ直前の野島社長から「中元のことを悪く思うな」と言われて以来、忘れることにしていた。

オレのことを想うお前の気持ちは嬉しかったが、正直今でも、中元殺しについては何とか止めることができなかつたのかと後悔する気持ちがある。

お前にオレが計画を知つたことを打ち明け、二人で協力して徳田一人を殺せばよかつたのではないかとも思っている。

最後になるけど、お前に対する気持ちを伝えておく。

お前と二人の人生を歩めて、本当に幸せだつたと感じている。

両親が亡くなつてからの辛い日々も、お前と一緒にだつたから乗り越えられた。

このままお前と二人の生活が、もっともっと続いていければいいのになと思う。

それだけが心残りだ。

前にも話したが、今回の事件はオレが引き起こしたことで、お前は知らない話なのだ。

だから、お前はお前で、思う存分、残された人生を幸せに生きて行って欲しい。

来世でも、お前と一緒にになりたい。

そのときは、妹としてではなく、一人の女性としてオレの前に現れて欲しいと思う。

優子、本当に今までありがとう。

あの世でも、お前のことをずっと見守っているからな。

兄と妹の手紙を読み終えた栗原の目は濡れていた。

今回の事件が、兄妹間の歪んだ愛が引き起こした事件であつたことを、彼は知つた。

栗原は、目の前に横たわる優子の亡骸に眼をやつた。

花のように儂い人生だつたのだと感じていた。

遠くからサイレンの音が聞こえてくる。

栗原は、二通の手紙を封筒にしまい、そつとコートの内ポケットに入れた。

平日の朝は、分刻みのスケジュールである。

前日の疲れを取るために、一分一秒でも長く寝ていたい。

布団の中から抜け出すことは、大変勇気のいることであった。

特に、今日のような冷え込みの厳しい朝は起きるのが辛い。

作田正志は、未練がましく自分の体温の染みついた布団にしがみついていた。

「あなた、早くしないと会社に遅れるわよ！」

「はあーい」

間延びのした返事を投げ返した作田は、意を決したように布団から抜け出した。

寝巻のままトイレに駆け込み、用をたす。洗面所で顔を洗った後、ダイニングルームへ向かった。

ダイニングルームでは、子どもたちが、すでに食事を始めていた。

作田は、奥の椅子に腰かけた。作田の指定席である。

ダイニングテーブルの上には、いつものように、卵料理とサラダ、焼けたトーストとカップに入ったコーヒーが並べられていた。トーストは焼き上がったばかりのようであり、薄らと湯気を立ち上らせている。

作田は、バターナイフを手に取り、マーガリンをトーストに塗った。

そのとき、玄関のチャイムが鳴った。

「誰かしら？」訝しげに呟いた妻が、玄関へ向かった。

玄関から、訪問者と妻とのやり取りが漏れ聞こえてくる。どうやら、訪問者は複数のような気がした。

やがてダイニングルームに戻ってきた妻が、意外な訪問者が現れたことを作田に告げた。

「あなた、警察の人が来ていますけど」

「警察？」

「あなたに話を聞きたいことがあるみたいだけど……」

不安げな表情を浮かべた作田が、玄関に顔を出した。

玄関には、四人の男がいた。いずれも冬物のコートに身を包み、寒さに身体をすくめるような表情で玄関口に立っていた。

その中の一人が、作田に向かって言葉を発した。

「作田正志さんですね？」

「はい」

「朝早くから申し訳ないのですが、昨年五月に起きた火災の件でお伺いしたいことがありますので、北川署までご同行願えませんか？」

「昨年五月に起きた火災？　すぐその路地を奥に入ったところの家が燃えた火事のことでしょうか？」

「そうです」

「そっ、そのことなら、あのとき目撃したことを警察で証言して、調書も作らされましたが」  
「そうなのですが、その件で別途確認したいことがありますね。署までご同行いただきたいのですが」

刑事たちの視線が、作田に突き刺さった。

言葉づかいは丁寧であるが、拒める雰囲気ではない。拒んだ途端に逮捕されそうな雰囲気を、刑事たちは醸し出していた。

「着替えて来ますので、少々お待ちいただけますか」

作田は、朝食を摂るのをあきらめ、スーツに着替えた。通勤時に持ち歩いているビジネス鞆を片手に下げる。

心配げな表情を浮かべる妻に対して、「去年の火災の件で何か聞きたいことがあるそうだ。だから、これから警察署に行ってくる。心配することはないよ」と声をかけた作田は、刑事たちとともに家を出た。

刑事たちが乗ってきた覆面車で北川署に向かう。

北川署に到着した作田は、取調室に案内された。机の片側の椅子に座らされる。

作田の正面には、ネクタイにスーツ姿の眼鏡を掛けた刑事が座った。一見して、真面目な銀行員のような風貌である。刑事一課長の寺原だった。

寺原の周囲を、川原班の川原班長、栗原刑事、山形刑事が補佐する。

そんな中、寺原が口を開いた。

「朝一番から恐縮ですなあ。実は、あの火災について、新事実が発覚しましてね」

「新事実？」

「はい。火災現場から二体の焼死体が発見されたことはご存知ですよ？」

「ええ」

「一体は家主の中元さんの遺体で、もう一体は徳田という男の遺体でした。ところで作田さん、あなたは、中元さんのことをご存知ですね？ 中元部品工業の社長だった人です」

「ナカモトさんですか？ さあ」

「ご存じないですか？」

「ええ」

「そうですか……。エレクトロアートというバーのことは、ご存知ですよ？ ○○駅前にある××ホテルの最上階にあるバーです。従業員が、あなたのことを覚えています」

「……ええ」

「中元さんも、エレクトロアートに足しげく通っていました」

「……」

「あなたは、エレクトロアートで、何度か中元さんとご一緒していますね？」

「さあ、とくに記憶にありませんが……。ああいうところでは、その日初めて知り合って意気投合した人とグラスを共にすることもありますから……。名前をお互い名乗らないで意気投合することもあります。ナカモトさんという方についても、そのような形でご一緒したことがあるのかもしれない」

「あなたが中元さんと二人で飲んでいる姿を、複数のエレクトロアートの従業員が目撃しています。中元さんは常連でしたので、従業員も中元さんのことはよく知っていたそうです。一人で静かに飲むのが好きだと言っていたのに、昨年に入ってから何度もあなたと二人で飲む姿を目撃して変だなと思ったそうです。それも、楽しそうに飲んでいるようには見えなかったと言っています」

「……」

「それはそうと、あなたは、ギャンブルが大変お好きなようですね」

「好きというか、たまに楽しむ程度ですが」

「そうですかね。周囲の人たちから聞いたところによると、あなたは毎週のように競馬場や競艇場に出かけているそうですね。あなたと一緒に競馬場や競艇場に遊びに行った人からも話を伺いましたが、あなたは、負けると熱くなって有り金全部をつぎ込んでしまうこともたびたびあったようですね」

「多少は熱くなりますが、ちゃんと節度を持って遊んでいますよ」

「そうですか。ところで、中元さんの遺品からこんなものが発見されました」

寺原が、机の上に一枚の紙を置いた。借用書であり、作田の名前と五百万円という金額が記されている。

作田の顔が青ざめた。

「作田さん。これが何だかおわかりですね？ あなたが中元さんに借金したときの借用書です。昨年五月三十一日が返済期限になっています。あなたは、何度も中元さんに返済の猶予をお願いしていたようですね。その姿が、エレクトロアートでも目撃されています。それと、あなたは、会社のカネに手を付けていますね？ それを、中元さんから借りたお金で一部穴埋めしたようですね。今あなたの会社に別の捜査員が出向いて、帳簿の確認をしています」

「……」

「中元さんの死因は刺殺で、そばに中元さんのDNAが付着したナイフが落ちていましたが、これと同一のナイフをあなたが昨年五月に購入したことも確認できました。それとですね、火災発生当夜に中元さんの家から出てくるあなたの姿を目撃した人もいます」

「……」

「あなたは、中元さんを殺害しましたね？」

捜査員たちから追及された作田が、犯行を自供した。

捜査員たちの読み通り、作田は、ギャンブル好きが高じて会社の金を着服し、その穴を埋めるために、エレクトロアートで知り合った中元に借金をした。

しかし、借金を返すあてのなかった作田は、返済期限の延長を申し出た。

一度は聞き入れた中元であったが、二度目の申し出に対してははねつけた。期日通りに返済しなければ、会社に訴え出るという言葉を口にした。

困り果てた作田は、事件当夜、最後の直談判をするつもりで会社からの帰宅途上中元の家を訪ねたが、冷たくあしらわれ、持っていたナイフで中元のことを刺してしまったということであ

った。

気が動転した作田は、中元の家を飛び出し、周囲を彷徨した。

そのときに、偶然、藤村雄太が扮した徳田らしき人影を矢原とともに目撃し、容疑を掛けられないようにするために、目撃者として名乗り出たということであった。

作田に、逮捕状が執行された。

三月も終わりに近づいたある日の午後、藤村家の墓前に立つ栗原の姿があった。彼は、事件が完全に解決したことを報告するために、墓にやって来た。

丘に面した海からは、爽やかな風が吹き込んでくる。

墓地に植えられたソメイヨシノのつぼみも開花し、五分咲きの体を示していた。

今年は三月の気温が高く、平年よりも早く桜が満開になるだろうという予報も出されていた。

栗原は、持参した花束を墓前に手向けた。花束の中央部分には、淡い青紫色をした勿忘草が顔を覗かせていた。

藤村と優子の心は、周囲から祝福されることもない、決して実ることもない愛であった。

しかし、それは真実(まこと)の愛でもあった。そのことを、自分は認めてあげたい。

勿忘草の花は、それを伝える栗原のメッセージでもあった。

花束を手向けた栗原は、線香に火をつけた。立ち上る薄煙が、風に揺らめきながら上空に消えていく。

藤村兄妹も亡くなり、守る人のいなくなった墓であるが、墓地を運営する寺院が手厚く管理してくれているのか、藤村家の墓はきれいに保たれていた。

栗原は、墓石に向かって手を合わせた。頭の中で、事件のことを思い浮かべる。

藤村が変装した徳田に関する目撃者の一人であった作田が中元殺しの真犯人であったという真相にも驚かされたが、なんといっても、やるせなさの残る事件であった。

藤村は、愛する妹が自分のために中元を殺害したのだという思いを抱えたまま、この世を去って行った。妹に宛てた手紙にも書かれていたが、死ぬ間際まで中元殺しを思いとどまらせることができなかつたのかと自分を攻め続けたことだろう。

死に逝く者の胸中を慮った栗原の目に、涙が浮かぶ。

墓へやって来た目的を思い起こした栗原は、兄妹がこの世を去った後の真実を振り返った。

中元殺しの容疑で逮捕された作田は、起訴され、一審で無期懲役の判決が言い渡された。

殺害の事実に関しては検察、弁護側双方ともが争わない姿勢であり、殺意の有無が焦点になっていた。 弁護側は控訴する姿勢を見せているが、殺害の事実は変わらない。

徳田殺害、放火の事実については、藤村兄妹が、被疑者死亡のまま送検された。藤村雄太に対しては、徳田に対する殺人罪、死体損壊罪、現住建造物等放火罪が適用され、藤村優子に対しては徳田に対する殺人未遂罪が適用された。

栗原が託された手紙も、証拠として裁判所に提出された。

マスコミも、このことを取り上げた。

一度結審した事件を再度送検することになったからであり、マスコミは、県警の不手際を攻め

立てた。

しかし、センセーショナルな扱われ方はされなかった。

北川署が中心となって手紙の存在をマスコミに秘匿したこともあり、また同時期にマスコミの興味を引く逃亡犯の逮捕や政治家のスキャンダルが重なったこともあって、藤村兄妹のニュースは日増しに小さくなっていった。

恐らく、あと数日も経てば、どこの局も扱わなくなるであろう。

栗原は、胸の中で兄妹に語りかけた。

「今日は、事件の真実が全て明らかになったことを報告しに来ました。中元さん殺しの真犯人も捕まり、殺害の事実を認めています。あなたたちの行為も明らかにされました。まだ裁判は続くと思いますが、事件の真実は全て明らかになったものと私は考えています。それと、あなたたちに一つ伝えておかなければならないことがあります。それは、優子さんが徳田さんに青酸カリ入り飲料を飲ませたとき、彼は死んではおらず気を失っていただけだったということです。後から入ってきた雄太くんが火をつけ、それで彼は死亡したのです。検死結果でも、徳田さんの死因は焼死ということになっていました。恐らく、口にした青酸カリの量が致死量ではなかったのでしょう。優子さんから預かった手紙は、証拠品として裁判所に提出しましたが、裁判が結審したら、そのときは、私が責任を持ってこの墓の中に返します。北川署も県警も、手紙をマスコミに公表しないことに決めています。だから、安心して眠ってください」

語り終えた栗原は、顔を上げた。墓石に彫られた藤村家という文字に視線を送る。

そのまま一礼し、栗原は立ち去ろうとした。

そのとき、風に揺られた二片の桜色の花びらが、栗原の目の前をヒラヒラと舞い、墓前に備えた花束の上に舞い落ちた。

栗原は、上を見上げた。

視線の先には、等間隔に植えられたソメイヨシノの花びらが風になびいていた。

栗原は、兄妹の魂が二片の花びらに乗り移り、舞い降りてきたのではないかと感じていた。

了

## 真実の向こうに咲いた花

<http://p.booklog.jp/book/85536>

著者：西河恵光

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/saigayosimitu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/85536>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/85536>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ